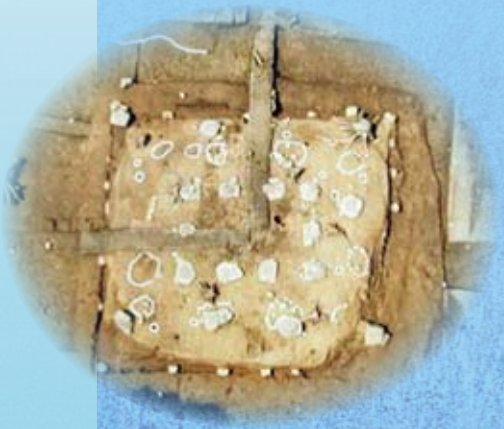
恵那市ふるさと学習読本 vol.8

正家廃寺と古代の恵奈

もっと知ろう　もっと学ぼう　ふるさとのこと

小板忠昭＝編著



ふるさと歴史編
The Histories of Our Hometown
2

恵那市公式キャラクター「エーナ」

恵那市教育委員会

恵那市ふるさと学習読本　vol.8

ふるさと歴史編
The Histories of Our Hometown
2

もっと知ろう　もっと学ぼう　ふるさとのこと

正家廃寺と古代の恵奈

恵那市教育委員会

序に代えて

恵那市に住む皆さんは、小学校の修学旅行で「奈良・京都」に出かけ、有名な寺社仏閣等を見学し、この体験と結び付けて、社会科の学習では、奈良時代は東大寺を建てた聖武天皇をはじめ、天皇が仏教の力で国づくりを行ったこと、平安時代になると一部の有力な貴族が政治を動かしたり、貴族の生活から華やかな服装や“かな文字”等の文化が生まれたりしたこと、その後武士が台頭する等々、この時代に活躍した人や出来事等について学び、古代日本の様子についてイメージ関心を膨らませると思います。

「正家廃寺」は、奈良や京都に都が置かれた奈良時代から平安時代に現長島町正家に存在した古代仏教寺院です。『恵那市ふるさと学習読本 vol.8　正家廃寺と古代の恵奈』の刊行にあたり、この本を読む皆さんに願うことは、正家廃寺が営まれていた奈良時代から平安時代について、先に述べた誰もが知る人の名前や出来事を歴史の流れの一コマとして知るだけではなく、この時代に恵那に法隆寺にも似た立派なお寺があったことから、この地が日本の政治や経済、文化の発展のための“重要な地”であったこと、その中で私たちの何十代も前の先人の方々が精一杯生活を営み、これが脈々と現在まで引き継がれていることを感じ取り、さらに興味を広げてほしいということです。

恵奈がどうして“重要な地”であったかということについては、学校の図書館にも置いてある『恵那市ふるさと学習読本 vol.2　恵那の歴史と物語 30 話』に書かれている「恵奈と朝廷をつなぐ　～次米～」「幻の古代寺院　～正家廃寺～」に書いていただいてあるので、合わせて読んでいただきたいと思います。

この本を執筆していただいた小板忠昭先生には、ご多忙の中を熱心に調査・研究を行い、私ども恵那市教育委員会の願いを十分に捉えた読み物資料として書き上げていただきました。心から感謝申し上げます。

また、監修をお願いした恵那市文化振興会会長の西部良治様には、かつて当教育委員会の委託を受け、実際に発掘調査を行った南山大学の一員として、奥深く実感のあるお立場からご指導をいただきました。誠にありがとうございました。

令和３年３月１日

恵那市教育長　**大畑雅幸**

正家廃寺と古代の恵奈

しょうげはいじにしえな

目次

古代の不思議…… 5
私たちの祖先…… 9
コラム①　年代を知るものさし…… 13
縄文の時代…… 14
縄文人の住居…… 18
弥生人の暮らし…… 20
コラム②　大野吾遺跡の語るもの…… 24
古墳の時代…… 25
恵奈の古墳…… 27
古墳時代の人々…… 30
コラム③　律令国家と天武天皇…… 34
恵奈の次米…… 35
恵奈の婢・古都賣…… 41
恵奈郡六郷…… 45
コラム④　やきもの…… 48
正家廃寺…… 49
東山道…… 54
恵奈と東山道…… 57
コラム⑤　国司・笠朝臣麻呂…… 62
古代寺院の謎にせまる…… 63
古代の不思議を読み解く…… 66
コラム⑥　恵奈古窯址群…… 70
写真資料…… 71
関連年表…… 74

古代の不思議

みなさんは、『恵那市ふるさと学習読本Vol.2　恵那の歴史と物語・30話』という本に、奈良時代に造営された**「幻の古代寺院・正家廃寺」**が紹介されていたことを覚えていませんか。ここでもう一度読みかえしてみましょう。

「恵那市の正家にある小高い山の上の広々とした空き地の一画に、『史跡 正家廃寺塔跡』と書いてある細長い石柱があります。そこは、まわりより一段高い場所で、中心に大きな二つに割れた石があり、その石には直径70cmほどの丸い穴が掘ってあります。これは塔の心柱（中心の柱）が建っていた礎石で、その石の周辺には、規則正しく並んだたくさんの礎石を見つけることができます。

また、古い時代の建物を調べてみると、高い塔がそれだけで造られることはなく、大きなお寺の中に金堂、塔、講堂、門などが一緒になっていたことが分かっています。つまり『正家廃寺の塔』も、大きなお寺の中に他の建物と一緒に建っていたと考えられるのです。

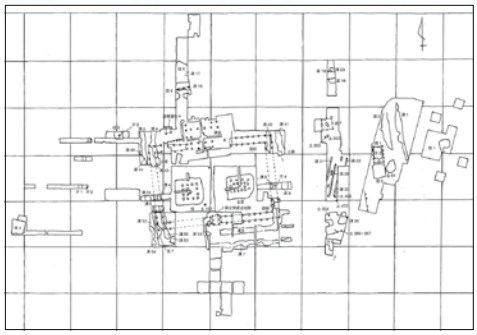
正家廃寺跡

正家廃寺の塔心礎

塔がどのような形や大きさをしていたかは記録に残っていないので、推測するしかありませんが、塔が建っていたと思われる礎石から分かる心柱の直径から、塔の高さが計算できます。そうすると、おどろくことに、高さはなんと約28mで、形は五重の塔であったと予想されるのです。ちなみに、日本で一番古い五重の塔といわれる、**法隆寺**※1の五重塔の高さは約31mですから、ひとまわりほど小さいぐらいの大きさだったのです。

恵那市教育委員会の発掘調査では、奈良時代に使われた陶器が数多く出土しました。また、**奈良三彩**※2の壺や二彩の浄瓶とよばれる貴重な陶器が発掘されました。塔などに使われた大きな鉄のクギなども見つかっています。おそらくは、このお寺は奈良時代中頃に建てられたのではないでしょうか。」

皆さんは、このことを知って「不思議だな?」と思うことはありませんでしたか。都から遠くはなれた恵那の地に、どうして法隆寺のような大きくて立派なお寺が建てられたのでしょうか。私



正家廃寺の伽藍配置

法隆寺五重塔

※1 「法隆寺(ほうりゅうじ)」とは、奈良県生駒(いこま)郡斑鳩(いかるが)町にある仏教寺院です。別名は斑鳩寺(いかるがでら)ともいいます。法隆寺は7世紀に創建された聖徳太子ゆかりの寺院です。金堂、五重塔を中心とする西院伽藍(さいいんがらん)と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられ、境内の広さは約18万7千平方メートルで、西院伽藍は現存する世界最古の木造建築物群です。

法隆寺の建築物群は、1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」としてユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されました。建造物以外にも、飛鳥・奈良時代の仏像、仏教工芸品など多数の文化財を有しています。

たちのふるさとである恵那に、中央の朝廷とつながりをもつような有力者がいたのでしょうか、恵那は、朝廷にとってそれほど重要な地域だったのだろうかなど、次々に疑問がわいてきますね。

この『ふるさと学習読本vol.8』の出発点はここにあります。都からはなれたこの恵那の地に、なぜめずらしい壺が出土し、立派な伽藍をもつような古代寺院が建立されたのでしょうか。この本では、この「古代の不思議」を読み解いていくために、「私たちの恵那がどのように発展してきたのか、都とどのような結びつきをもってきたのか」などを視点にさぐっていこうと思います。遠い昔のことですから、残された歴史資料がとても少ないです。そこで、恵那の地に残るかぎられた遺物や遺跡、また恵那に関係する文書や資料を紹介しながらさぐっていきたいと思います。

なお、この読本では、私たちのふるさとを「**恵奈**」と表していきます。なぜなら、この地名が、歴史上、初めて文字で表されたときの大切な表記だからです。

奈良三彩

※2 「奈良三彩(ならさんさい)」とは、二色以上の色釉(いろぐすり)で上絵付けし、低火度で焼成(しょうせい)した陶器のことです。
緑・白・褐、または褐・緑・藍の唐三彩(とうさんさい)、主として赤・黄・緑を用いた明三彩(みんさんさい)などの中国の陶器があります。
なかでも唐三彩(とうさんさい)はとても有名で、これをまねて作った日本の陶器が奈良三彩と呼ばれています。

正家廃寺跡から出土した
三彩壺・二彩浄瓶

天武6年(677)には、大和朝廷に献上した「次米」につけられた**木簡**※3に「三野国刀支評恵奈五十戸」と書かれてありました。また、天平勝宝2年(750)の『**東大寺奴婢帳**』※4という正倉院の所蔵文書には、「恵奈郡絵下郷」と書かれてあったのです。そこで、これらの表記を大切にして、このふるさと学習読本の題名を『**正家廃寺と古代の恵奈**』としました。

木簡

※3 「木簡(もっかん)」とは、古代の東アジアで、墨(すみ)で文字を書くために使われた「短冊状の細長い木の板」のことです。紙の普及(ふきゅう)により廃(すた)れましたが、荷札(にふだ)には長く用いられました。

東大寺奴婢帳

※4 「東大寺奴婢帳(とうだいじぬひちょう)」とは、奈良時代に関する豊富な情報を含む、東大寺正倉院に保管されてきた文書群(ぶんしょぐん)の一つです。おもに東大寺写経所(しゃきょうじょ)が作成した帳簿群(ちょうぼぐん)を示しています。

正倉院は、聖武(しょうむ)天皇・光明(こうみょう)皇后ゆかりの品をはじめとする、天平(てんぴょう)時代を中心とした多数の美術工芸品を収蔵(しゅうぞう)していた施設で、奈良県奈良市の東大寺大仏殿の北西にある高床の大規模な校倉造(あぜくらづくり)の倉庫です。

私たちの祖先

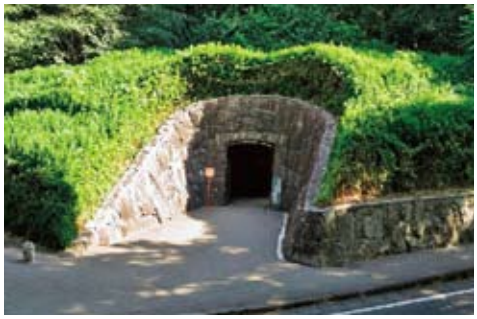
地球上に人類が誕生したのは、今からおよそ400万年前のアフリカ大陸でした。彼らはその後、**猿人(アウストラロピテクス)**[※1]とよばれ、長い時間をかけて地球上にちらばっていきました。ゆくてをはばむ寒い気候、山や砂漠、海、氷河を克服し、およそ100万年前には東アジアまで到達したといわれています。日本列島では、関東に火山灰が降りしきる時代(数万年前ごろ)には人間が住んでいたことが、群馬県「**岩宿遺跡**」[※2]の赤土の崖から黒曜石でつくられた槍先形の石器が発見されたことからわかっています。

それでは、私たちの祖先が恵奈に住み始めたのはいつ頃のことなのでしょうか。また、どんな生活をしていたのでしょうか。このことを探っていく手立ては、やはり土の中に埋もれている遺物や遺跡を調査していく方法しかありません。

恵奈では、笠置町の「**堀田遺跡**」から、まだ土器がつくられなかった時代

アウストラロピテクス

※1 「猿人(アウストラロピテクス)」とは、1924年以降にアフリカ南部で発見された化石人類の一群のことです。約400万年前から約150万年前頃まで生息(せいそく)していたと考えられています。脳容量はゴリラくらいで、直立歩行していました。



岩宿遺跡

※2 「岩宿(いわじゅく)遺跡」とは、群馬県みどり市笠懸(かさかけ)町岩宿にある遺跡のことです。1947年に、相沢忠洋の遺物発見を契機(けいき)に、1949年関東ローム層から石器が出土し、縄文時代以前の日本に旧石器(先土器)文化の存在が確認されました。

堀田遺跡址にあるメンヒル
(笠置町・旧姫栗小学校跡)

の遺物がみつかっています。明治43年(1910)の笠置町の旧姫栗小学校の校舎改築のおりに、校庭の地表下60cmから90cmで多数の石器が出土しましたが、その中で黒曜石製の石器が発見されています。この石器は**「尖頭器」**とよばれ、木の棒などの先端につけられ投槍として使用されました。また、中野方町の**「若宮遺跡」**や笠置山中腹の**「堀田遺跡」**からは、動物の皮をはいだり、肉を切ったりする時以外に、大型の投槍としても使用されたと考えられる**「掻器」**も発見されています。

これらの石器は、いずれも黒土層から黄褐色土層の移り目のあたりから出土しました。黒土層が縄文土器の文化層とみなされていることから、これらの石器はさらに古い年代に属すると推定されています。そのことは、わたしたち恵奈の祖先が、縄文時代よりも前から、この地で生活していたことを証明するものと考えられているのです。おそらく、今から1万年から2万年前の時代です。**旧石器時代**※3ともよばれた時代のことです。

尖頭器
(笠置町・堀田遺跡出土)

掻器
(笠置町・堀田遺跡出土)

旧石器時代

※3 「旧石器時代(きゅうせっきじだい)」とは、人類の歴史上最古の、そして最も長い時代であり、約300万~200万年前に始まり、約1万年前に終わりました。このあと中石器時代と新石器時代がこれに続きます。これは地質学上からいえばほぼ洪積世(こうせきせい)に相当します。当時の人類は、食料を獲得する方法としては狩猟と採集だけにたよっていて、牧畜や農耕をまったく知らなかった時代です。

また、この時代は、**氷河時代**※4の最末期にあたり、現在の気候とは大きく異なっていました。年平均の気温は今よりも7～8度低かったと推定され、恵奈は、ちょうど今の北海道に近い気候だったと想像されます。また、当時は、氷河の発達により海水面は低下し、現在よりも100mあまりも低かったといわれています。したがって、日本列島は大陸と陸続きで、大型の動物たちが自由に往来し、それを追って人類も列島内にやってきました。伊勢湾などの浅い湾もすべて陸地化していて、現在の日本列島とその様子はまったくちがっていたのです。

動物も今とはずいぶん異なっていて、ナウマン象・マンモス・オオツノジカ・ヘラジカなど、縄文時代には絶滅した大型獣が生息していました。おそらく、恵奈の祖先もこうした大型の動物を投槍で獲って生活していたと思われます。

さて、この時代の人々は、どのようなところで生活していたのでしょう。この時代の遺跡のほとんどは、小河川に面し

氷河時代

※4 「氷河時代(ひょうがじだい)」とは、世界的に気候が寒冷で、氷河が中緯度地方までも拡大した時代のことです。この時代には、ヨーロッパや北アメリカは大規模な大陸氷河によっておおわれ、少なくとも 6回の氷期(ひょうき)のくりかえしがあったといわれています。

氷河の発達によって海水量の変化がおこり、氷期には海面が今日よりも約100mも低下しました。このような気温の低下や海水面の変化は、地球上の自然環境やそこに生活する動植物に大きな影響を与えました。日本では、大規模な氷河の発達はありませんでしたが、日高山脈や日本アルプスに、カールなどの氷河作用のあとが残っています。

氷河時代の日本列島
(大陸と陸つづきであったため、ナウマン象などの大型の動物が渡ってきました。)

氷河時代の狩猟の様子
(兵庫県立考古博物館ジオラマ)

た丘陵や大地の縁辺に営まれていました。旧石器時代の日本では、自然の岩陰や洞窟をそのまま風よけ、雨よけとして住居に用いることはまれでした。これまでの発見例をみると、簡単なテントのような跡がみられる程度でした。どうやら、この時代の祖先は、一か所に住居をかまえたわけではなく、移動生活を営んでいたと考えられます。

岐阜市にある「**寺田遺跡**」からは、焼けて赤く変色した石が集まった「**礫群**」とよばれるものが発見されました。土器をもたなかった当時の人々は、熱した石を用いることで、食べ物の調理をおこなっていたものと思われます。熱した石を鉄板に見立てれば石焼き料理ができます。皮袋などに水をため、焼けた石を投げいれ水を沸騰させれば煮ることもできます。寺田遺跡の礫群の礫は何度もくりかえし熱を受けていました。また礫群が重なってみつかってもいました。このことから、彼らは周期的にこの地をおとずれていたことがわかります。

寺田遺跡の礫群
（岐阜市教育委員会）

槍先型尖頭器
（相沢忠弘記念館所蔵）

コラム1

年代を知るものさし

私たちは、遺跡から出土する物の年代をどのようにして知ることができるのでしょうか。新旧を比較するものさしは、「地層」にあります。地層は、上に上に積み重なっていくので、基本的に下の地層のものほど古いということがわかります。したがって、出土した層の上下関係から、一つの遺跡のなかで物の新旧を知ることができるのです。

では、離れた場所にある遺跡の間で新旧の関係を知ることはできるのでしょうか。そのものさしは「鍵層」にあるといわれています。鍵層とは年代の基準となりうる地層のことです。例えば、大昔に南九州に「姶良」という火山がありました。今から2万年ほど前、この火山は大爆発をおこしました。その時、大量の火山灰を噴き上げ、火山灰は西風にのって日本の広い範囲を覆いました。遠く東北地方でも、この姶良火山灰が見つかっているのです。私たちは、この火山灰を遺跡で見つけることによって、関東や九州などの遺跡とも新旧の比較を行うことができるのです。

次に、「今から何年前」という絶対的な年代を科学的に導き出すものさしがあります。「年輪年代」、「古地磁気」、「放射性炭素」などの測定法です。ここでは、「放射性炭素」を用いた方法について紹介しましょう。自然状態の炭素には、「C^{14}」というやや壊れやすいタイプの炭素が一定の割合で含まれています。私たち動物も木々などの植物も同じです。しかし、生物は死ぬと新たな炭素の取り込みができなくなります。一方、C^{14}は時間がたつにつれて壊れて少なくなっていきますので、C^{14}の割合を計算することで、その生物が死んでからの時間の経過を知ることができるのです。

私たちは、これらの方法をいくつも駆使して、遠い昔の遺物の年代を導き出しているのです。

縄文の時代

縄文時代とは、縄目のついた土器がたくさん使われた時代ということで名づけられました。この時代は今から約1万6千年前に始まり、約3千年前に弥生時代が始まるまでのおよそ1万年間の時代といわれています。

縄文土器

縄文遺跡から最も多く出土するものに、「**石鏃(やじり)**」があります。恵奈の縄文遺跡でもたくさん発掘されていますが、どの遺跡からも必ず発見されています。このことから当時の祖先の生活について、うかがい知ることができます。

石鏃(やじり)

縄文時代になると、氷河期が終わり温暖な気候になります。海水面も上昇し、日本列島は大陸から切り離されます。そのため大陸から渡ってきたナウマン象やマンモスといった大型の動物は絶滅し、これらにかわって、ニホンジカ・イノシシ・カモシカなどの中型動物とノウサギ・キツネ・タヌキ・アナグマ・ムササビ・テンなどの小型動物が、日本の野山をかけめぐるようにな

縄文時代の暮らしのようす

ります。

旧石器時代に、投槍などで大型動物を獲っていた私たちの祖先は、縄文時代になると、小型動物を獲るのに適した「**弓矢**」を発明したのです。狩猟具が槍から弓矢へと変化し、石鏃が出現するようになったのです。

この時代は、鉄や銅などの金属は知られておらず、本格的な農耕や牧畜も行われていませんでしたので、当時の人々の生活は、自然にあるものを極限まで利用した生活でした。たとえば、切ったり、けずったりする道具はすべて石を利用してつくりました。石鏃だけでなく、おの・きり・やり先などと同じはたらきをするものをつくり上げていました。

この時代の恵奈の遺跡から、「**磨石・石皿・凹石**」などとよばれる遺物も出土しています。磨石は、河原におちているような石ですが、磨りへった痕が残っています。石皿はいろいろな形のものがありますが、石の中央がややくぼんだものが多く、凹石は普通の石とちがってどこかに小さなくぼみがあり

石鏃（やじり）等の出土物
（中野方町・八幡遺跡）

石皿・磨石
（中野方町・尾の上遺跡出土）

石皿・磨石
（飯地町・岩切遺跡出土）

ます。

当時の人々にとって、狩猟と同時に、植物の採集も重要な仕事でした。温暖な気候となってきた日本列島には、シイ・カシ・クリ・ブナ・ナラ・カエデなどの広葉樹に広くおおわれるようになりました。この広葉樹の森林が人々に多くの木の実を提供したのです。

縄文遺跡から多く出土する木の実は、クルミ・ドングリ・クリ・トチなどです。これらの木の実は、いずれも堅い殻につつまれています。この堅い殻を割るのに使われたのが凹石です。また、トチやドングリなどはアクが強いので、アク抜きをしてからでないと食べることができません。アク抜きをするために木の実を粉にします。そのために使った道具が、石皿や磨石ということになります。当時の人々は、この粉を粥状にして食べたり、練ってまるめてモチやダンゴ状にし、汁に入れて食べたりしたようです。

また、縄文人たちは、粘土を焼いて様々な土器を作り上げました。その時に飾りのためか、あるいは何かほかの

縄文人の暮らしのようす

採集したと思われる木の実

目的があったのか、土器の外側に縄目など多様な文様がつけられていました。特に定型化した型がなく、ほとんどが深鉢と呼ばれる型ですが、時には浅鉢や甕などが出土することもあります。

恵那市東野の「**大野吾遺跡**」では、深鉢を再利用した「甕棺」と呼ばれる埋葬用の土器も出土しています。この深鉢は、食べ物を調理したり、貯蔵したりするために用いられたため、外面にススが付着していることもありました。

縄文土器
（串原・大平遺跡出土）

深鉢
（東野・大野吾遺跡出土）

縄文人の住居

それでは、当時の人々はどんなところに住んでいたのでしょうか。はじめは、旧石器時代と同じように主に洞くつなどに住んでいました。しかし、しだいに「**竪穴住居**」という形の家に住むようになってきたことがわかってきました。竪穴住居とは、地面を30cmほど円形または方形に掘り下げ、そこに柱を立てて屋根を葺いた建物のことです。現在の住居のような壁はありませんでした。屋根は茅などで葺きました。この形式の住居はずいぶん後の時代まで残り、平安時代でも地方の庶民の住居は竪穴住居であったところが多くあります。

竪穴住居

私たちの恵奈でもたくさんの縄文遺跡が確認されていますが、これらの遺跡のほとんどが、今は水田や畑地としてひっそりと埋もれています。みかけでは、普通の土地とまったく変わらないこのような遺跡は、多くは縄文時代の村の跡といわれています。発掘してみるといくつもの「竪穴住居跡」、「貯蔵

穴」、「墓の跡」などが出現します。

飯地町の「**鹿路山遺跡**」・三郷町の「**下田遺跡**」・東野の「**大野吾遺跡**」などで、縄文時代の人々の住居跡や貯蔵のための穴が発見されました。木造の屋根は腐ってなくなっていましたが、地面に掘りこんだ竪穴の中に柱穴や炉の跡などがみつかり、土器や石器などさまざまな遺物が出土しています。

鹿路山遺跡の場合は、やはり深さ30cmほどの地面を掘りこんだもので、入口には土を踏みかためたスロープがあり、南側につけられていました。下田遺跡の住居跡は、直径約5.5mの楕円形で、6本の柱穴がみつかっています。入口はやはり南側にありました。大野吾遺跡からは、1本の細長い石が発見されています。この石は祈りの道具として使われていたものと思われ、他の遺跡の例から考えて、炉跡のそばに立てられていたようです。この時代の人々は、立石とか大木に神が宿ると考えていたようです。

住居跡・鹿路山遺跡
（飯地町）

住居跡・下田遺跡
（三郷町）

土偶

弥生人の暮らし

今から3千年ほど前に、大陸文化の影響を受けて、全く新しい文化が生まれました。この新しい文化は、その土器が発見された場所の名前をとって「弥生文化」と呼ばれています。そしてこの時代を「弥生時代」と呼ぶようになりました。

弥生時代では、縄文土器よりも焼きがかたく、文様のつけかたもちがった土器、すなわち、**弥生土器**を使っていました。また、**銅剣・銅鉾・銅鏡**、あるいは各種の鉄器など金属器を使用していました。しかし、縄文文化と弥生文化の最も大きなちがいは、稲作が行われるようになったことです。弥生時代になると、人々は米を食べるようになったのです。

私たちの恵奈では、中野方町の**「長根遺跡」**から、弥生時代の小さな土器片が出土しています。この土器片が重要なのは、その土器片に**「籾の痕」**がついているところにあります。この籾痕のついた土器片は、弥生時代中頃のものと

弥生土器

銅剣・銅鉾・銅鏡など

弥生土器（深鉢復元物）
（中野方町・庄兵衛田遺跡出土）

推定されていますが、恵奈の人々も、この時期（紀元前100年頃）に、稲作を行うようになっていたこと、米を食べるようになっていたことを示す貴重な資料といえます。恵奈には、この弥生時代の遺跡がほかにもあります。中野方町の**「宿竹遺跡」**・**「庄兵衛田遺跡」**、長島町の**「祖理見遺跡」**などで、弥生土器が出土しています。

弥生時代の土器は、縄文土器とは大きく異なり、**「壺、高杯、甕」**という三形式の土器がセットになっています。そして土器の色も赤褐色をしており、文様も極めて単純で、縄文土器のような複雑な文様は付けられていません。弥生土器の形式は、稲作と関係があるようで、壺は、米を貯蔵するための容器、高杯は食物を盛るもの、そして、甕は水を入れたり、食物を煮たりするものであったと考えられています。

弥生時代は、農業が行われた時代であり、縄文時代が主に自然の中から食料を得ていたのに対して、人々は食料を作り出していました。もちろん「狩猟や採集」も行われていましたが、あくま

弥生土器片
（中野方町・長根遺跡、○印に籾の跡）

弥生後期の土器
（長島町・祖理見遺跡出土）

壺・高杯・甕など

高坏（土師器）
（長島町・祖理見遺跡出土）

でも中心は「米作り」にあったようです。そのため集落は定住的なものになり、貧富の差も生じてきました。また、大陸(朝鮮、中国)との交流が始まり、さまざまな大陸の技術や文化が入ってきて、鉄や青銅などの金属が使われるようになったのです。弥生時代には、ひきつづき石器も使われました。縄文時代の石器と同じような石鏃(やじり)と磨製石斧、石錘などのほか、新たに「**石包丁**」と呼ばれる稲の穂摘具がつくられています。

さて、この時代はやはり土器の形式によって前期、中期、後期の三つの時代に分けられています。弥生前期、弥生文化は北九州に始まり、東に進んで尾張地方にまでやってきます。中期には美濃地方からさらに東進して東北地方にまで進出します。

私たちの恵奈の地にも、この中期(紀元前100年頃)になって、弥生文化が伝播してきたものといわれています。これ以前の人々は、縄文時代からの伝統を強く残した生活を送っていたものと思われます。そして、この頃、日本列

弥生時代の稲作の様子

石包丁

佐賀県吉野ヶ里遺跡　発掘の様子

島には、すでに「**小国家**」※1が成立しており、いわゆる「**漢委奴国王**」と刻印された金印は、この時期の北九州にあった国に、中国の漢王朝より与えられたものと伝えられています。

小国家の成立

※1　この頃、日本の各地域で小国家と呼べるような集団が生まれてきました。そのことは、中国の『漢書地理志（かんじょちりし）』という書物には、「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国となる。」と記載されていることからもわかります。

　また、『後漢書東夷伝（ごかんじょとういでん）』には、実際に「倭（わ、当時の日本名）」の奴国（なこく）の人が後漢の光武帝（こうぶてい）に朝貢（ちょうこう）してきたことが記載されていますが、この時に印鑑を奴国の使者に渡したことも記されていました。

　この印鑑が、江戸時代になって福岡県の志賀島から出土しました。その印は金印で、「漢委奴国王」（かんのわのなのこくおう）と記されていたのです。

金印　漢委奴国王

コラム❷

大野吾遺跡の語るもの

東野の「大野吾遺跡」は、阿木川の深い谷の中にある台地に位置しています。阿木川ダムによる水没地域にあったことから、昭和56年（1981）に発掘調査が行われました。

縄文前期から古墳時代にわたる複合遺跡でしたが、その中でも古墳時代の1辺4mほどの方形の小さい7棟の住居跡が注目を集めました。この住居跡から5世紀末～6世紀の土師器の甕・瓮など、6世紀初めから中期の須恵器の坏・提瓶などが出土しています。ところが6世紀中ごろまで続いたこの遺跡も、それ以後は人の住んだ形跡がみられなくなってしまうのです。

広さ数ヘクタール程度のこの台地で、小規模の水田耕作は可能でも、水田耕作だけで、ここの人々のすべての生活を支えたとは到底考えられません。彼らの生活の糧の大部分は、焼畑農業や採集にたよったものと考えられます。

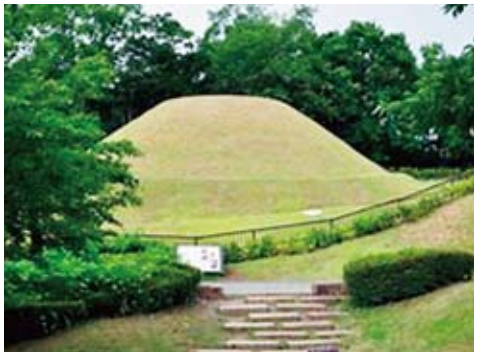
さて、6世紀中ごろに造られた中津川市阿木の「宮の根6号墳」から、鉄鎌の副葬品が発見されています。鉄製農具を手に入れた農民は、ようやく中小河川の制御に成功し、生活の主要な基盤が、水田耕作に移ったものと考えられます。それにしたがって、この山間（大野吾）の台地は放棄されたものではないかとみなされています。

古墳の時代

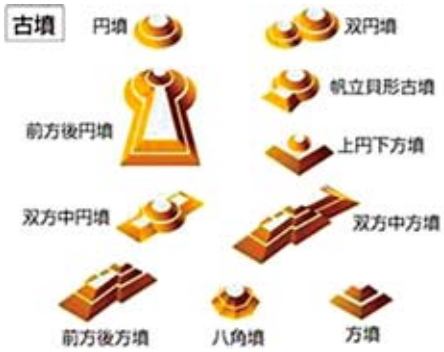
「古墳時代」は、古墳がたくさん造られた時代ということで、この名前がつけられました。古墳とは、土を盛って大きな塚を造り、そこに人を埋葬する施設です。わが国では、3世紀末頃から7世紀にかけてさかんに造られ、天皇や豪族などがそこに葬られました。

この時代は、各地の豪族が力をつけ、さらに**大和朝廷**※1が全国を統一し、日本という国が成立する時代にあたります。古墳の形や埋葬された人と一緒に埋められたいろいろな品物(**副葬品**)によって前期と後期に区分されています。

古墳の大きさは、ピラミッドをしのぐ巨大なものから直径が数メートルの小さなものまでさまざまで、形もいくつかの種類に分けられます。古墳の内部には、埋葬される人が置かれる場所があります。初期のころは、被葬者を木で作った棺に納めて(権力者は棺の回りを粘土で覆ってから)土で覆っていましたが、その後、棺を入れる部屋を石



円墳



古墳のかたち

副葬品

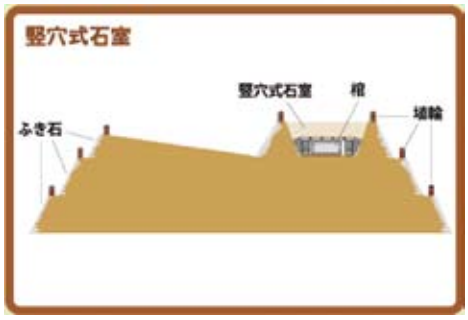
大和朝廷

※1 「大和朝廷(やまとちょうてい)」とは、古代日本の最初の統一国家と考えられている大和国家(やまとこっか)の中央機関(ちゅうおうきかん)のことです。

有力な豪族であった皇室(こうしつ)が、諸豪族を併合(へいごう)してつくりあげました。おそくとも4世紀の中ごろまでには中部地方から北九州までを統一し、以後、関東、東北を平定、さらに朝鮮(ちょうせん)半島に進出したと考えられています。所在地は大和(やまと、現在の奈良県)の飛鳥(あすか)地方とされています。

で作るようになりました。これを石室といい、「前期古墳」では、上から被葬者を納めてふたをしてしまう「**竪穴式石室**」がおもでした。日本の代表的な古墳である**大山古墳(仁徳天皇陵)**※2のような大古墳などがそれにあたります。古墳時代の中頃より以前に多く分布し、権力を誇示するために造られましたが、まさに天皇・豪族の墓といえます。

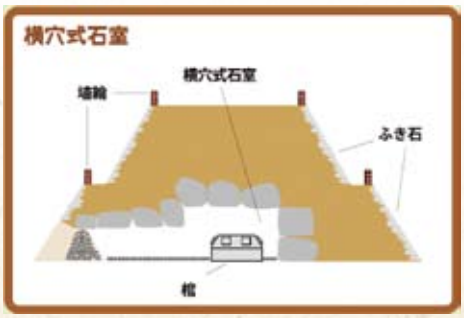
ところが、後期(5世紀以降)になると部屋の横に出入口をつけて何度も出入りできるように工夫された「**横穴式石室**」の古墳が多くみられるようになってきます。横穴式石室というのは、古墳の盛り土の中に石の部屋を設けて、横に羨道とよばれる出入り口を持つ古墳です。出入り口の蓋石を取り除けば、何体もの遺体を次々と埋葬することができます。このような古墳は「後期古墳」とよばれ、規模も小さく数も飛躍的に増加しました。このことから、後期古墳は、権力を誇示するというよりも、家族の墓としての役割が強いといわれています。



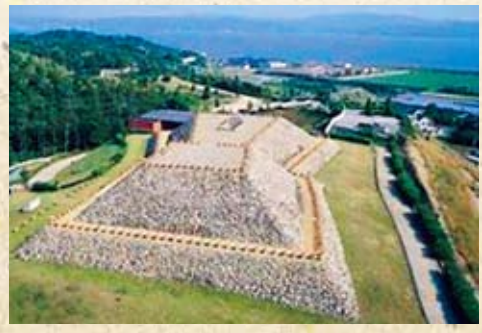
竪穴式石室の構造

大山古墳(仁徳天皇陵)

※2 「大山古墳(だいせんこふん)」とは、大阪府堺(さかい)市堺区大仙(だいせん)町にある古墳のことです。形状は前方後円墳(ぜんぽうこうえんふん)、百舌鳥(もず)古墳群を構成する古墳の1つで日本最大の古墳といわれています。
実際の被葬者は明らかではありませんが、宮内庁により百舌鳥耳原中陵(もずのみみはらのなかのみささぎ)として仁徳天皇の難波高津宮(なにわのたかつのみや)の陵墓に比定されています。そのため、仁徳天皇陵(にんとくてんのうりょう)や仁徳陵古墳ともいわれています。



横穴式石室の構造


方墳

恵奈の古墳

では、私たちの恵奈では、どのような古墳が分布していたのでしょうか。恵奈では、二百数十基の古墳がみつかっています。そのうち現在の恵那市内には、消滅した古墳も含めて約136基の古墳が確認されています。中でも大井町、長島町、山岡町、岩村町に多く、特に千田17号墳の属する長島町の千田古墳群は、恵奈の中心をなす古墳群といえます。

また、単独の古墳はわずかで、ほとんどの古墳が一定の地域にまとまって分布する「古墳群」の形をとっています。形もすべて「円墳」であり、築かれた時期も古墳時代後期に属する古墳とみなされています。古墳が築かれた年代は、その古墳から出てくる副葬品、すなわち鏡や土器などを手がかりにして決めていきますが、恵奈では、そのほとんどが6世紀から7世紀にかけての後期の古墳であると考えられています。

それでは、私たちの恵奈には、権力を誇示するような有力な豪族は一人もい

能万寺古墳
（長島町）

徳平古墳
（明智町）

千田17号墳の石室開口部
（長島町）

千田17号墳の横穴式石室
（恵奈地方最大の石室をもち、6世紀後半につくられた。）

なかったのでしょうか。その疑問に答えるために、恵奈で最も大きな横穴式石室を持つ古墳、長島町久須見千田にある「**千田17号墳**」を詳しく調べてみましょう。

石室の全長は12.0m（玄室の長さ5.5m、羨道の長さ6.5m）、最大幅2.5m、高さ3.0mで、一種の円天井風に天井石が組まれています。昭和52年（1977）に測量と内部の調査が行われ、「須恵器」のほかに勾玉、金環、水晶製の「三輪玉」という全国的にも珍しい装飾品が出土しています。

三輪玉というのは、太刀の柄の部分につける飾り玉で、上面に大小3つのふくらみがあり、下面が平らになった長さ3 ～ 4cmの装飾品のことです。この三輪玉の発見例は、全国的にもきわめてめずらしく、岐阜・愛知・三重の東海3県では最初の発見といわれています。また、このような装飾太刀は、身分の高い人にのみ使うことが許されたものであるといわれています。

巨大な石室や出土遺物などからみて、千田17号墳に葬られた人物は、非常

千田17号墳の露出した天井部

千田17号墳の出土品
（須恵器・金環・勾玉・管玉）

千田17号墳の出土の三輪玉
（太刀の柄に付ける装身具）

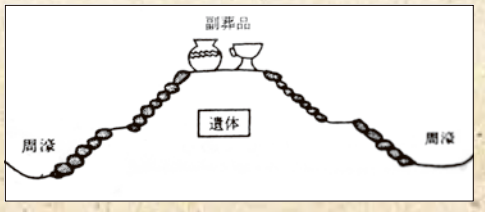
に強い政治力をもっていた人物ではないかと考えられています。おそらく、大和朝廷とも密接な関係を持っていたのではないでしょうか。

もう一つ、興味深い発掘調査があります。先に、恵奈の古墳は6世紀以降に造られた後期古墳がほとんどであるとされてきましたが、三郷町の「森山5号墳」の調査から、この古墳は、5世紀から6世紀初頭に造られたものではないかとして、今までの定説をくつがえすものになりました。

森山5号墳は、横穴式石室をもたず、遺体を直接盛り土に埋葬しています。こうした古墳は、「**直葬形式古墳**」と呼ばれています。小規模ながら周囲に堀をもち、古墳表面は葺き石によりおおわれていました。さらに、ふつうなら古墳内部に納めるべき副葬品が、古墳の表面に置かれていたこともわかりました。これらのことから、この古墳は、権力誇示的な性格をもち、ある程度の有力者のお墓と考えられているのです。

森山第５号墳址
（三郷町）

森山第５号墳葺石
（三郷町・森山遺跡出土）



直葬形式古墳の断面図（模式図）
（恵奈地方での前期古墳はこうした直葬形式のものが多かった。）

古墳時代の人々

次に、当時の恵奈の人々の暮らしに着目してみましょう。

古墳時代は、「**鉄**」が本格的に使われるようになり、鉄の鏃や鎧、刀などの武器が現われ、斧や鋤などの農工具も鉄で作られるようになりました。また、製作に非常に高度な技術を要する青銅鏡やガラス製の玉なども多く使われるようになってきました。

土器も今までとは異なるものが現れます。それは、「**須恵器**」と呼ばれる陶質の土器で、ろくろを用いて形を整え、傾斜面を掘り抜いて作った穴窯で焼きます。須恵器の製作技術は大陸から伝わり、近畿地方から全国へその技術が広がりました。特別な用途や目的に使われ大切にされたらしく、古墳の副葬品としてたくさん見つかります。

また、古墳時代には、須恵器とともに弥生土器の伝統を引き継ぐ「**土師器**」という素焼きの土器も使われていました。土師器は、日常の生活に用いられた実用的な土器で、住居跡からたくさ

鉄製農具の普及

須恵器

土師器

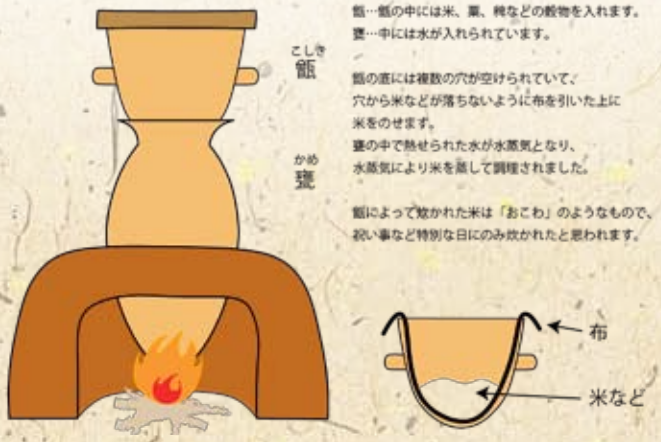
ん出土します。もちろん古墳からも土師器は出土しますが、住居跡から出土する土師器は、カマドなどに使用されたままの状態で発見されることもあって、その使い方がよくわかります。

東野の阿木川上流にある「**大野吾遺跡**」は、昭和56年(1981)に発掘調査が行われましたが、驚くことに、古墳時代の「村の跡」が、そのまま凍結していたかのようにして再現されたのです。

この古墳時代の恵奈の村は、7棟以上の住居で構成されていました。それぞれの住居は、1辺が4m前後の四角い形をした竪穴住居で、規模の小さなものでした。各住居には、壁際に平らな石を組み合わせた竈をもっていましたが、1号住居跡では、竈のすぐ横に、「**甑**」とよばれるものが甕の上にのったまま出土していたのです。

古墳時代の住居跡
(東野・大野吾遺跡第１号住居跡)
(○印には、当時の生活そのままに甑が甕の上にのったまま掘り出された。)

甑(こしき)
(大井町・丸池遺跡出土)



甑(こしき)の使用方法
(甑の底には穴があり、蒸し器として使用されました。)

甑というのは、甕の底に穴をあけた形をしており、米などを蒸す道具のことです。使い方は、甑の底に布をしいて中に米を入れ、それを水を入れた甕の上にのせて使う。この甕を竈にかけて火であたためると、甕の水が蒸気となり、上にのせた甑の中の米が蒸せるというしかけです。

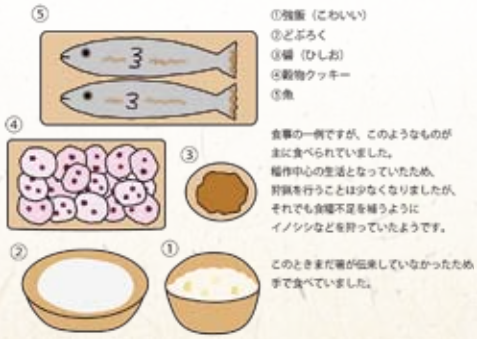
このように、甑が使用した状態そのままに出土することは、全国的にみてもたいへんめずらしいことと言われています。また、竈のすぐ横には、須恵器の坏とよばれる椀のような器が、整然と重ねて置かれていました。

また、当時、高床式の住居が支配階級では一般化していたようですが、民衆の住居は、弥生時代と大差のない竪穴式の住居でした。弥生時代の竪穴式の住居と異なるのは、住居の片隅に竈が付いたことと、簡単な壁のようなものが付いたことでした。そして住居の形は方形のものが一般化しました。

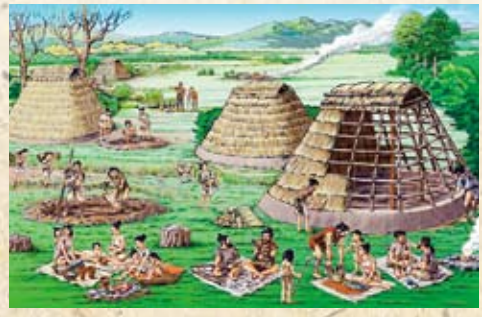
古墳時代の人々の生業は米作りが中心で、鉄製品が普及したこともあって、灌漑設備をととのえながら耕作地を拡

竪穴住居

竪穴住居内部



古墳時代の食事



古墳時代の暮らし

大していきました。**花粉分析**[※1]という科学的な分析手法によって、当時かなりの森林が伐採されて耕作地に変えられていったことも明らかになっています。

花粉分析

※1 「花粉分析（かふんぶんせき）」とは、現在の土壌や地質時代の地層の中から、花粉や胞子（ほうし）をとりだし、研究することです。花粉のかたちから植物の属の区別ができるので、過去の森林の歴史、植生（しょくせい）の状態、気候の変遷などの解明に役立ちます。泥炭、亜炭、褐炭などの炭質物や有機物を含む泥岩などは、花粉が多くて花粉分析に適しています。

久後古墳
（明智町）

平古墳
（山岡町）

コラム3

律令国家と天武天皇

壬申の乱で大友皇子をやぶった大海人皇子は、天武元年(673)に「天武天皇」として即位し、兄・天智天皇がはじめた改革を受け継ぎ、律令国家建設を推し進めていきました。

天武天皇は、壬申の乱に勝利してつかんだ強大な権力を生かして、皇族や豪族を、天皇を頂点とする国家機構のなかに再編成しました。天武12年(684)に八色の姓を定め、天武13年(685)に官人の冠位を定めるなど、皇族の地位を高めた新しい身分制度のもとで、律令制に対応する官僚制度の確立をめざしました。また、飛鳥浄御原令の制定、国史の編纂、貨幣(富本銭)の鋳造、藤原京の建設などを命じたことも天武天皇の大きな事業で、のちの政権に引き継がれていきました。

ところで、皆さんは、日本ではじめて「天皇」と名のったのは天武天皇だといわれていることを知っていますか。天武天皇は強大な権力を獲得したことから、『万葉集』に「大王は神にしませば」とも歌われたように、なかば神格化された存在となりました。そこで、自らの称号として、それまでの「大王」に代わり、唐の皇帝・高宗も一時的に用いたといわれる「天皇」を選んだと考えられています。

「天皇」とならんで、国号を「日本」※と定めたのも天武天皇だとされています。日本は、もともと国内では「ヤマト」の名が使われ、対外的には「倭」の名称が使われていました。しかし、この「倭」は中国が東夷(東の異民族)である日本を侮蔑してつけたものであったため、律令国家として生まれ変わったことを対外的に示す意味からも、新しい国号「日本」が定められたのです。

※日本は「日本」と読むこともあります。

恵奈の次米

ここまで、旧石器時代から古墳時代まで、私たちの恵奈のことや人々の暮らしを探ってきました。やはり、恵奈に遺る遺跡や遺物や関連する資料などから推定できることばかりでした。文字で「恵奈」のことが表され、当時の様子を探ることできるようになったのは、**飛鳥時代**※1の次のできごとが初めてとなります。

それは、日本最古の貨幣「富本銭」が出土したことで有名な奈良県明日香村の**飛鳥池遺跡**で、平成10年(1998)、日本の古代史の解明に役立つたくさんの「**木簡**」が発見されたことでした。その中の一つに、恵奈の古代史の謎を読み解いていくために、とても重要な木簡も発見されたのです。それは、たて15.1㎝、よこ2.8㎝と小さなものでしたが、表と裏に墨で、次のように文字が書かれていました。

飛鳥時代

※1 「飛鳥時代(あすかじだい)」とは、奈良盆地南部の飛鳥地方を都とした時代のことです。推古(すいこ)天皇(592~628年)の時代を中心として、その前後の時期をいいます。その範囲についてはいくつかの説がありますが、文化史の上では、仏教渡来から大化改新(たいかのかいしん、645年)までの間をいいます。政治史の上では、聖徳太子摂政就任の593年から大化改新まで、または平城遷都(710年)までの間をいうことがあります。

飛鳥池遺跡

発見された木簡
(奈良県明日香村・飛鳥池遺跡出土)

(表)「**丁丑年十二月　三野国刀支評　次米**」
(裏)「**恵奈五十戸造　阿里麻　春人服部枚布五斗俵**」

読んでいくと、次のようになります。「丁丑(ていちゅう)年十二月三野国(みののくに)刀支評(ときのこおり)次米(すきまい)」、「恵奈五十戸造(えなのさとのみやつこ)阿里麻(ありま)春人(つくひと)服部枚布(はとりべのひらふ)五斗俵(ごとだわら)」となります。

この木簡の文字から、何を読み解くことができるでしょうか。一緒に探っていきましょう。

「丁丑年十二月」は、「天武天皇の時代の6年(677)の12月」のことです。「三野国刀支評」は、「美濃国(みののくに)※2土岐郡(ときのこおり)」のことです。当時の恵奈の里は、土岐郡に属していたことがわかります。「次米」は、「すきまい」あるいは「すきのこめ」と読みます。一般的には「主基米」という漢字で書きます。朝廷への「献納米(けんのうまい)」のことです。

「恵奈」は、皆さんも知っているとおり、恵那のことです。「五十戸造」は、当時一つの里が50戸の単位でした。また、「造」は姓(かばね)で地位を表すことから、「恵奈五十戸造」は、恵奈の里の長(おさ)という意味でしょう。そして「阿里麻」は、その里長(さとおさ)

美濃国

※2 「美濃国(みののくに)」とは、岐阜県の南部を占める古い国名のことです。東山道88か国の一つで、東は信濃(しなの)国、西は近江(おうみ)国、南は三河(みかわ)国・尾張(おわり)国・伊勢(いせ)国、北は越前(えちぜん)国・飛騨(ひだ)国に接します。面積約6461平方キロメートルです。

『和名抄(わみょうしょう)』という古文書には多芸(たぎ)、石津(いしづ)、不破(ふわ)、池田、安八(あはち)、大野、本巣(もとす)、席田(むしろだ)、方県(かたがた)、厚見(あつみ)、各務(かがみ)、山県(やまがた)、武芸(むげ)、武儀(むぎ)、郡上(ぐじょう)、賀茂(かも)、可児(かに)、土岐(とき)、恵奈(えな)の18郡が載せられていますが、天正(てんしょう)年間(1573～1592年)に海西(かいさい)、中嶋(なかしま)、羽栗(はぐり)の3郡が増え21郡となりました。

の名前と考えられます。「春人服部枚布」は、服部枚布という人物が精米したことも分かりました。

つまり、発見されたこの木簡から、飛鳥時代の天武天皇の時に、朝廷の神前に供える「次米」を、私たちの恵奈の里から献上していたことが分かったのです。

ここで少し、「次米」についてふれ、解説をしておきましょう。

7世紀後半、律令制度が整備されるなかで、朝廷での儀式や儀礼も制度化されてきました。そうした儀式・儀礼の一つに**「新嘗祭」**※3があります。これは、11月の下の「卯の日」に、天皇自らが新穀を神とともに食し、「幣くら」というささげものを多くの神々に奉献する儀式で、その年の稲の収穫を祝うものです。とくに、天皇即位後最初の新嘗祭は**「大嘗祭」**といわれ、一世一度の大祭として位置づけられていました。これらの儀式に献上される新穀こそ「次米(主基米)」なのです。

大嘗祭では、悠紀殿・主基殿を中心とする**大嘗宮**という殿舎が建設され、

新嘗祭

※3 「新嘗祭(にいなめさい)」とは、天皇が新穀を天神地祇(てんしんちぎ)に供え、みずからも食する祭のことです。祭儀(さいぎ)は11月の下の卯(う)の日(三卯のあるときは中の卯の日)に中和院の正殿である神嘉殿(かみよしみどの)に行幸(ぎょうこう)して行なわれるのを本儀とし、行幸のない場合は神祇官が行ないました。

なお、即位後初めて行なうものを「大嘗祭(だいじょうさい)」といいますが、古くは新嘗・大嘗の区別なく用いられました。明治維新後、太陽暦が採用されてから祭日は11月23日と定められました。現在はその日を「勤労感謝の日」として国民の祝日の一つとしています。

大嘗宮

神にその年に収穫された新穀・酒料などが献上されました。その新穀・酒料を奉納するために、あらかじめ神祇官によって選定された国(郡)を悠紀国・主基国とよびました。美濃国は、このあとの8～9世紀に5回にわたって、この悠紀国・主基国をつとめています。これは、この時期、各国の中でもっとも回数が多く、美濃国が天皇即位に関する国家儀式の中で、重要な役割を担っていたことを物語っています。

選定された国(郡)では、国司や郡司の指導のもと、新穀や酒料などを献上したり、地域の風俗の歌舞を奏したり、語部が地域に古くから伝わる伝承の奏上をおこなうといった重要な役割を果たしました。そのあと、悠紀国(主基国)に対しては、国司に対する叙位とともに、国司・郡司から歌女・農民に至るまで、関係者に対して禄が与えられ、その年の庸米は免ぜられたとのことです。

しかし、天武6年(677)の新嘗祭は11月に行われたようです。先にふれた「木簡」には「十二月」と書かれており、月が合っていません。この時の恵奈の里か

大嘗祭

らの「献上米」は、新嘗祭の米というよりは、神前に供(そな)えた米とみるのがよいかもしれません。

それでも、当時の次米の献上をしのび、地元の人たちが中心となって、現在でも、「次米祭(すきまいまつ)り」が行われています。恵奈の里のお米が、千3百年以上も前に朝廷に献上されていたことにちなみ、その記念行事が、平成24年から毎年「**恵奈(えな)の里次米(さとすきまい)みのり祭(まつり)**」として開かれているのです。この祭りでは、5月の「**お田植え祭**」、9月に「**抜(ぬ)き穂(ほ)祭**」、「次米献納(けんのう)行列」、「お米の楽市(らくいち)」、10月に「**次米献納**」と、5つの行事が行われています。

ところで、7世紀の飛鳥時代に、なぜ、恵奈の里からの献上だったのでしょうか。天武天皇の時代に、朝廷にとって、恵奈の里は特別な土地だったのでしょうか。

ある大学の先生が次のようにお話をされていました。「恵那の里には古代の都と東北地方を結ぶ官道・**東山道**※4が通っていたことから、天武朝(てんむちょう)においては、美濃から信濃へという東山道ルートをかなり政治的に重視していたと考

お田植え祭(5月)

抜き穂祭(9月)

次米献納(10月)

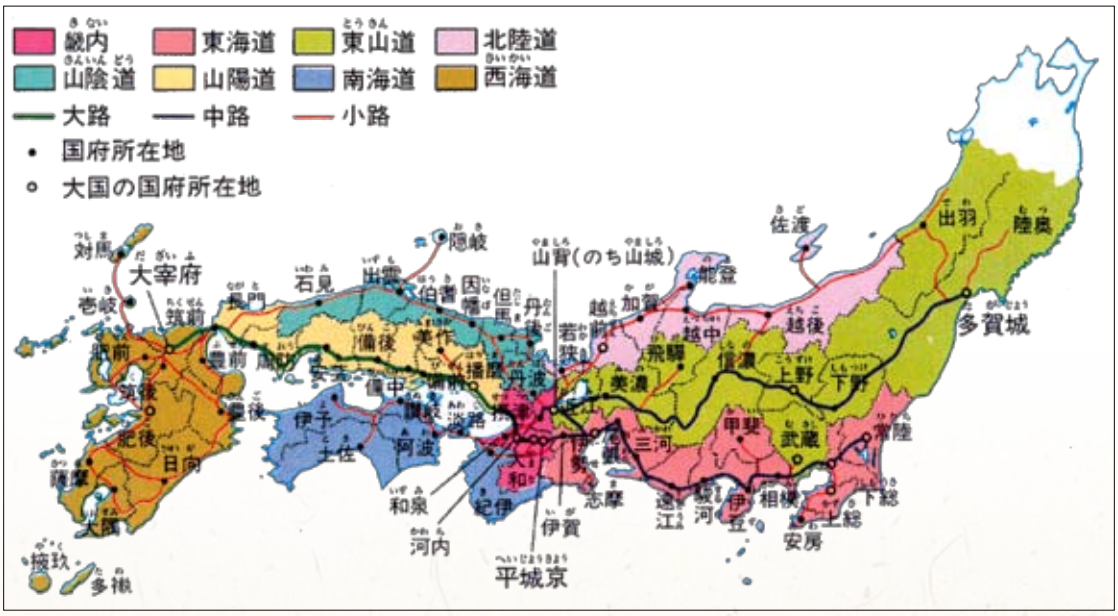
東山道

※4 「東山道(とうさんどう)」とは、律令時代の五畿七道(ごきななどう)の一つです。701年、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、武蔵、下野の7ヵ国の国府を連ねる街道を定め東山道と称し、街道筋の国域を含めた行政区分にも利用しました。のち陸奥、出羽の2国を加え、武蔵を東海道に移して8ヵ国としました。

古くは山道とも称し畿内と東国を結んだ中央道のことです。宿駅の整備が進み、各駅には馬10頭を常備して公用に利用しました。中世以降は東海道の裏街道的存在となり、近世の中山道がこれにあたります。

えられる。このような政治的動向の前提として恵奈の里から主基米(すきのこめ)が献上されたのではないか。」

　このお話には、「正家廃寺の不思議」を読み解いていく重要なヒントが含まれていると考え、いよいよ、少しずつふれることのできる文献や資料を探りながら、読み取っていこうと思います。



五畿七道

恵奈の婢・古都賣

次は、私たちの「恵奈」のことが、初めて文献に記された「婢・古都賣」のお話です。「古都賣」というのは、恵奈に住んだ人々のなかで、歴史上に初めて名を残した人の名前です。年令は20才、右ほほに黒子のある美しい娘であったと伝えられています。そして、彼女の身分は婢、つまり女の**奴隷**※1でした。

奈良時代の天平12年(741)、聖武天皇は仏教の繁栄をねがって**盧舎那仏(東大寺大仏)**※2をつくることを計画しました。そして天平勝宝元年(749)に大仏は完成しました。完成時の天皇であった孝謙天皇は、全国に奴婢(奴隷)を差し出すことを命じましたが、美濃国には、年令30才以下15才以上で、顔かたちのよい奴(男の奴隷) 3人と婢(女の奴隷) 3人を差し出すことを命じています。

翌天平勝宝2年(750)、美濃国から6人の奴婢が差し出されました。その中の1人が恵奈郡絵下郷の「婢・古都賣」だったのです。このことは、東大寺の

奴隷(奴婢)

※1 「奴婢(ぬひ)」とは、律令制における賤民(せんみん)のことです。人格を認められず、売買(ばいばい)、譲渡(じょうと)、寄進(きしん)の対象となりました。奴(ぬ)は男、婢(ひ)は女をさし、所有者が国家であれば官奴婢(かんぬひ)、私人であれば私奴婢(しぬひ)と呼ばれました。また、奴婢とは召使いとして雑用(ざつよう)を行う下男下女であり、所有者により牛馬のように物として扱われていたのです。

盧舎那仏(東大寺大仏)

※2 「盧舎那仏(るしゃなぶつ)」とは、奈良県奈良市の東大寺大仏殿(金堂)の本尊である仏像(大仏)のことです。一般に奈良の大仏(ならのだいぶつ)として知られています。
聖武(しょうむ)天皇の発願(ほつがん)で、天平17年(745)に制作が開始され、天平勝宝4年(752)に開眼供養会(かいげんくようえ、魂入れの儀式)が行われました。その後、中世、近世に焼損(しょうそん)したため大部分が補作(ほさく)されており、当初に制作された部分で現在まで残るのはごく一部です。

正倉院の所蔵文書『**東大寺奴婢帳**』の「美濃国司解」に次のように記されていたのです。

婢　古都賣　年二十　右頬黒子　値稲捌伯束
右恵奈郡絵下郷　戸主県主人足口　県主息守之賤

この記録には、「古都賣」以外に2人の名が書かれています。1人は「県主一足」、もう1人は「県主息守」といいました。いずれも男性です。県主一足の身分は戸主（家族の長）であり、県主息守はその口（家族の一員）で、古都賣の直接の持ち主でした。当時の家族は、今とちがって大家族制度をとり、1家族平均20名前後でした。とくに有力な家族になると100名をこえるものもあり、多くの奴婢を所有していたといわれています。このことから、おそらく県主一足も、恵奈の有力な豪族の一人であったと考えられるのです。

当時の社会は、身分制の厳しい社会でした。美しい娘古都賣は、こうした**身分制**※3の最下層におかれた一人でした。記録には、彼女は稲800束で売られたとあります。当時、馬1頭の価格が800束か

『東大寺奴婢帳』より
（東大寺正倉院所蔵）

律令制下の身分制

※3　奈良時代以前の大和朝廷政権では、天皇を中心とした豪族たちの血縁関係の集合体である「氏（うじ）」を持つ者たちが、朝廷から政権内の地位を示す「姓（かばね）」をもらい受ける「氏姓制度（しせいせいど）」がありました。
　遣唐使の派遣で中国の唐で行われていた律令制の日本への導入が7世紀後半から進み、645年には一般の人民を良民と賤民に大別する「良賤（りょうせん）の法」が制定されます。
　さらに、良民は「官人、公民、品部、雑戸」に区分され、賤民は「陵戸、官戸、家人、公奴婢・官奴婢、私奴婢」に区分されています。
　この身分制度は、平城京に遷都される前に制定された大宝律令によって、奈良時代にも引き継がれていったのです。

ら1,000束程度でした。20歳の美しい娘も、彼女が婢であるという身分のために、牛馬なみにあつかわれていたのです。

恵奈から奈良の都に送られた「婢・古都賣」は、「恵奈の次米」と同じように、どうして、恵奈からの献上だったのでしょうか。不思議はさらにふくらんでいきますが、残念ながらその理由を伝える確かな記録は残っていませんでした。

しかし、私たちの恵奈のことが、歴史上はじめて文献に登場したのが、この『東大寺奴婢帳』の「婢・古都賣」にまつわる記録だったのです。

「次米」のことが書かれた飛鳥池遺跡の木簡史料から、天武6年(677)の恵奈に**律令制の行政区画**※4「国－郡(評)－五十戸(里)」が施行されていたこと、当時はまだ恵奈郡は成立しておらず、土岐郡の一部にすぎなかったことがわかりました。しかし、「婢・古都賣」のことが書かれた『**東大寺奴婢帳**』により、奈良時代の孝謙天皇の時には、すでに恵奈郡が成立していることがわかりま

奈良時代の婢の姿

律令制の行政区画「国郡里」

※4 「国－郡－里(こくぐんり)」とは、律令制における地方行政組織のことです。全国を国・郡・里の三段階の行政区画に編成し、国には中央から国司(こくし)を派遣し、郡には現地の有力豪族を郡司(ぐんじ)に任命し、里には同じく現地の村落の有力者を里長(りちょう・さとおさ)に任じました。国、郡には大・上・中・下・(小)などの差があって規模は一定せず、里は50戸を1里とする画一的なものでした。

国司は、中央の官僚(朝廷に仕えている役人)が任命されて地方に派遣されました。国のほとんどの権限をすべて手中に収め絶大な権力を持っていました。任期6年で終了。郡司は、国司が取り扱う仕事内容をより実務的に行いました。具体的には、田んぼの割り当てを取り決めたり税の徴収を取り扱ったり、簡単な裁判などを担当しました。郡司は中央から派遣された官僚ではなく、その地域の有力な豪族が登用されていました。税を徴収する権利を持っていることからもわかるように、絶大な権力を持っていました。

里長は、地元の有力な農民から選ばれました。国司・郡司のような巨大な権力はなくて、税の取り立てなどが主な仕事でした。

した。わざわざ土岐郡から分郡（ぶんぐん）し、恵奈郡として建郡（けんぐん）したのですから、朝廷にとってそれなりの理由があったこともわかります。

※古都売に係わる記述箇所

東大寺奴婢帳
（東大寺正倉院所蔵）

恵奈郡六郷

全国統一を完成した大和政権は、7世紀の終わりころ、法律を整備し、天皇を中心とした律令国家をつくりあげていきました。大和政権は、8世紀に入ると奈良に中国の都をまねた**平城京**※1をつくり、全国を国－郡－里（郷）に分け、支配するようになりました。

国ごとに国府がおかれ、中央から国司が派遣されました。郡司には在地の有力豪族が任用され、郡家で政務がとられました。彼らのなかには、かつての**国造**※2などもいて、中央の審査を経たうえで任用され、朝廷による在地支配を直接に担う存在となりました。

郡の下には、当初は50戸からなる里がおかれ、里長がその行政を担当しました。霊亀3年（717）に里は「郷」と改称され、地方の行政組織は、国－郡－郷制となったのです。『**延喜式**』※3という文書によれば、美濃国は、8世紀には14郡、9世紀後半には18郡の名が記載されており、『**和名類聚抄**』※4によれば、郷の数は125郷となっています。こうし

平城京

※1 「平城京（へいじょうきょう）」とは、奈良時代に日本の首都であった都市のことです。唐（とう）の都長安城（ちょうあんじょう）を模倣（もほう）して建造された都城であり、現在の奈良県奈良市の西部の一部、中心部及び大和郡山（やまとこおりやま）市北部に位置し東西8坊(約 4.3km)の面積をもち、全域72坊に区画設定されていました。

中央北域に大内裏（だいだいり）を置き、中央を南北に走る朱雀大路（すざくおおじ）によって左京・右京に二分され、さらに南北・東西を大路・小路によって碁盤（ごばん）の目のように整然と区画されていました。平安時代に入るとまもなく荒廃（こうはい）し、外京のみが東大寺、興福寺（こうふくじ）の門前町（もんぜんまち）として残りました。

国造

※2 「国造（くにのみやつこ）」とは、大和朝廷の地方官の呼び名です。（こくぞう）ともいいます。初めは各地方の「くに」の支配者でしたが、国家統一後は地方官として制度化されました。当時の「くに」は、ほぼ後世の「郡」に当たる広さで、国造は大化改新（たいかのかいしん）後おおむね郡司（ぐんじ）となりました。

延喜式

※3 「延喜式（えんぎしき）」とは、平安中期の律令の施行細則（しこうさいそく）のことです。50巻。延喜5年（905）藤原時平（ふじわらときひら）らが醍醐（だいご）天皇の命により編纂（へんさん）を始め、時平の死後藤原忠平（ただひら）らにより927年完成しました。施行は967年。弘仁式・貞観式をふまえて編纂されたもので、のちの律令政治の基本法となりました。

た地方制度の整備を通して、律令国家は地方支配を確実なものにしようとしたのです。

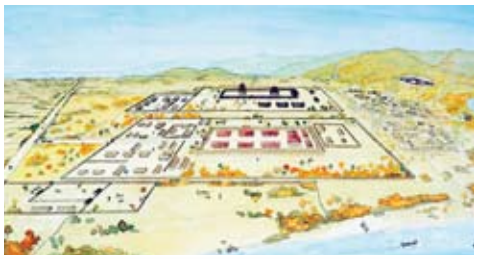
私たちのふるさとは、美濃国に属し、恵奈郡におかれることになりました。恵奈郡の中心には、**郡家**※5 とよばれる役所が置かれ、郡全体を支配しました。郡家には、長官の郡司のほかに、100 人前後の人々が働いていました。『和名類聚抄』によれば、恵奈郡は、さらに「絵上郷・絵下郷・坂本郷・安岐郷・淡気郷・竹折郷」の 6 つの郷に分かれていました。

1 つの郷には 50 戸により構成されるとさだめられていましたが、当時の 1 戸は、平均 20 人前後でなりたっていたので、1 郷は 1,000 人前後、恵奈郡全体では、6,000 人ほどの人口があったとみられています。絵上・絵下の 2 つの郷は、1 郷 50 戸と定められたときに、2 つの郷に分けられたと考えられ、恵奈郡の中心にあったとみなされています。

もちろんさまざまな説がありますが、2 つの郷は、この地方の**古墳の分布**からみて、今の恵那市の大井と長島付近がその中心にあって、郡家とよばれる役所も

和名類聚抄

※4 「和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」とは、〈わみょうるいじゅしょう〉とも読み、《和名抄》と略します。また〈和〉は〈倭〉とも記します。醍醐(だいご)天皇の皇女勤子内親王の命により、源順(みなもとのしたごう)が撰上(せんじょう)した漢和辞書のことです。承平(しょうへい)年間(931 ～ 938)に編集されています。漢語の出典や和名などを説明した一種の百科事典といわれています。



郡家

※5 「郡家(ぐうけ)」とは、律令制下における郡の役所のことです。郡衙(ぐんが)・郡府(ぐんぷ)とも呼びます。大宝令で、「評(こおり)制」が「郡制」に改められて成立しました。

律令国家の郡支配の拠点(きょてん)で、郡司(ぐんじ)が郡の民政・裁判などを行いました。「郡庁(ぐんちょう、郡司が政務を執る政庁)」、「館(やかた、郡司の官舎・国司の宿舎)」、「厨家(くりや)」、「正倉(しょうそう)」からなり、都と国府間の連絡のために「伝馬(てんま)」がおかれました。

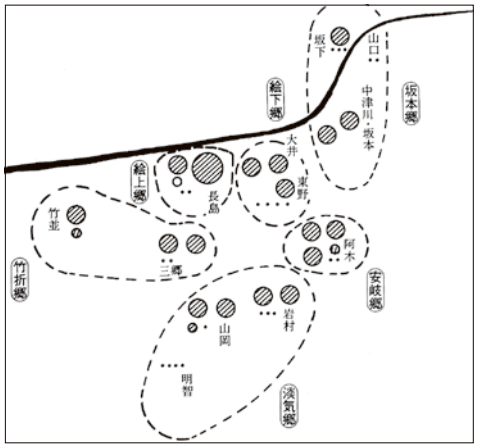
市	地域名	数
恵那市	大井	21
	長島	68
	東野	10
	三郷	22
	武並	15
	岩村	23
	山岡	26
	明智	4
中津川市	中津	16
	坂本	4
	阿木	37
	坂下	10

地域別古墳数

ここに置かれていたのではないかと考えられています。したがって、正家廃寺が造営された「正家」という地名は、「郡家があったところ」が由来だったのかもしれません。先にふれた「絵下郷」の「婢・古都賣」も、郡の中心であるこのあたりに住んでいたのかもしれません。

次に、他の郷を今の地域にあてはめていきましょう。坂本郷は中津川市の落合・中津を中心とした地域、安岐郷は中津川市の阿木・岩村を中心とした地域、淡気郷は山岡・明智を中心とした地域、そして、竹折郷は恵那市の武並・三郷を中心とした地域に、それぞれの郷があったとみられています。

一方で、今の長野県の木曽地方が当時、恵奈郡に属していたことから、**藪原・宮の越・須原・野尻などの地域を絵上郷とする説**に基づいてあてはめていくと、絵下郷は、坂下・川上・山口・苗木・福岡・付知・加子母、坂本郷は、神坂・落合・中津川・坂本、竹折郷は、大井・長島・東野・武並、阿岐郷は、阿木・岩村、そして淡気郷は、今の山岡や明智を中心とした地域と考えられています。



恵奈郡六郷の位置Ⅰ
（古墳分布をもとにした六郷の位置推定）

恵奈郡六郷の位置Ⅱ
（木曽地域を絵上郷とする説をもとにした六郷の位置推定）

コラム4

やきもの

私たちがいつも何気なく食事の時に使っているものに「陶磁器」があります。一般的に「やきもの」といいます。これは粘土をこねて,形をつくり、焼いたものです。しかし、やきものには、粘土のちがいや吸水性、焼く温度、透明性の有無などによって、呼び方がちがって「土器・陶器・磁器」と言います。このような分類もいくらかあいまいさがあり、正確ではありませんが、大まかに分けて紹介します。

「土器」は、人類がはじめて自然の土を加熱してつくったものです。素地に吸水性があり、800℃前後の低温で焼いたもので、茶褐色をしています。釉薬を施していません。縄文土器・弥生土器・土師器などがこれにあたります。今でも、植木鉢などがつくられています。

「陶器」は、朝鮮半島から須恵器の製作技術が伝えられた5世紀中ごろから生産がはじまりました。これは、窯をつくることによって、 1,000℃以上の高温で焼くことができるようになり、土器に比べて堅く吸水性が少なく、透明度はありません。陶器は、そのあと三彩などの多彩陶器・灰釉陶器・山茶碗、そして志野・織部といった桃山陶、江戸時代に大量に焼かれた日用品など長く生産され、今でも伝統工芸品として生産されています。

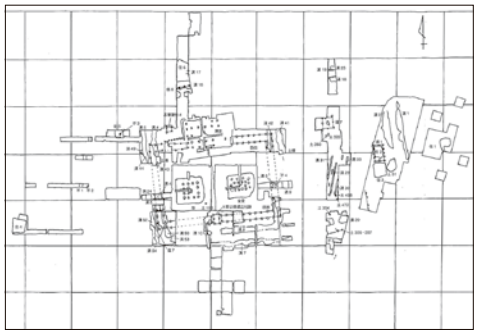
「磁器」は、17世紀の初頭にはじまりました。従来の粘土に粉砕した長石や陶石を加えたものを原料に使っています。焼く温度はもっとも高くて、1,300 ～ 1,400℃で透明度があります。ふだん使っているごはん茶碗のようにうすくて堅く、たたくと澄んだ金属音がします。現在、東濃地方で生産されているやきもののほとんどはこの磁器のことです。

正家廃寺

正家廃寺は、恵那の市街地の南の端にあって、街をながめることができる小高い丘にありました。奈良時代の８世紀前半につくられはじめましたが、残念なことに、９世紀後半に、おもな建物は火災をきっかけにしてなくなってしまいました。

寺院は築地にかこまれた東西二つの区画で成り立っていました。西側の「伽藍地」と呼ばれる区画は東西 53.7m、南北 70.2m。北側に講堂、東に金堂、西に塔があって、あの有名な奈良の**法隆寺と同じような伽藍配置**になっています。また、築地に向かって回廊があったことも発掘調査で分かっています。東側の区画は、東西 53.7m、南北 66.0m。寺院の造営及び維持管理にかかわる建物があったと考えられています。

遺跡全体が地域の人々に守られてきたこの正家廃寺跡はとてもよく保存されていて、奈良時代の律令制下における仏教の受けいれや伽藍の造営、維持管理など、この時代の地方寺院のようすを具体的に



正家廃寺の伽藍配置

法隆寺の伽藍配置

発掘調査時の塔跡

学んでいくことができる貴重な遺跡といわれています。

長島町正家字寺平に、古くからこの寺跡があることは知られていましたが、いつの時代のどのような性格の遺跡なのか、はっきりしたことはわかりませんでした。

しかし、昭和52年度から54年度にかけて行われた南山大学の範囲確認調査や、平成5年度から11年度にかけて行われた恵那市教育委員会による遺構確認調査によって、8世紀前半から造営が始まり、9世紀後半に火災が原因で廃絶したこと、寺域は築地塀に囲まれた東西110m、南北70mの範囲で、金堂、塔、講堂などの伽藍は奈良県斑鳩町の法隆寺と同じ配置をとっていたこと、なかでも金堂は、残された柱の土台石（礎石）の配置から、法隆寺にある国宝**「玉虫厨子」**※1と同様で、全国でもめずらしい特殊な建築構造をもつことなどが明らかとなりました。

また、調査では、須恵器や灰釉陶器、そして鉄釘などのほか、二彩の浄瓶や三彩陶器、金銅製の風鐸（小型のもので、

発掘調査の様子

発掘調査時の金堂跡

玉虫厨子

※1 「玉虫厨子（たまむしのずし）」とは、奈良県斑鳩（いかるが）町の法隆寺（ほうりゅうじ）が所蔵（しょぞう）する飛鳥（あすか）時代（7世紀）の仏教工芸品のことです。装飾に玉虫の羽を使用していることからこの名がつきました。国宝に指定されています。

正家廃寺出土遺物
（風鐸・風招・円盤）

塔の宝輪の飾りらしい）など、地方寺院では**発見例が少ない貴重な遺物**が出土しました。

三彩陶器は、緑、赤、白の三色の釉薬がかけられた美しい陶器で、中国では唐の時代に盛んに製作されました。わが国でも奈良時代に**「奈良三彩」**という唐の三彩陶器を模した陶器が製作されました。東大寺正倉院に、緑・黄・白の三色の釉薬に彩られた陶器が５点おさめられています。これを一般に**「正倉院三彩」**ともよばれています。正倉院三彩は、唐三彩の影響のもとに日本で製作されたもので、その製作技法は、**遣唐使**※2によってもたらされたものと考えられています。さらに、唐三彩は、**ペルシャ**※3の多彩ガラス器に刺激されて生まれたものであるともいわれています。

この正倉院三彩と同じ三色に彩られた陶器が、昭和52年に発見されたのです。もちろん岐阜県下でははじめてのことだったのです。しかも、この正家廃寺の三彩は、かたく焼きしめられており、白・緑・黄色の釉薬の色調も美しいものだったのです。けっして正倉院三彩に見劣り

正倉院三彩（奈良三彩）

正家廃寺から出土した二彩・三彩

唐

※2　「唐（とう）」とは、7世紀にはじまった中国の王朝名のことです。
　高祖李淵（りえん）が隋（ずい）王朝の恭帝（きょうてい）の禅譲（ぜんじょう）をうけて建てた統一王朝で、西暦618から907年まで続きました。都は長安（ちょうあん）。律令制（りつりょうせい）・均田制（きんでんせい）・租庸調制（そようちょうせい）・府兵制（ふへいせい）による中央集権体制を確立しました。
　当時世界の一大文明国となり、日本も遣唐使（けんとうし）を派遣して文物・制度文化の導入に努めました。

ペルシャ

※3　「ペルシャ」は、現在のイランを表すヨーロッパ側の古い名称です。中国名（漢名）は、「波斯（はし）・波斯国（はしこく）」といいます。波斯と書いて「ペルシア・ペルシヤ」と読ませることもあります。イランの主要民族や主要言語の名称でもあります。
　世界帝国として繁栄した唐には、西域を通りササン朝ペルシャの文化が伝えられ、さかんにシルクロード交易が行われました。都の長安（ちょうあん）は国際都市としてのにぎわいをみせていました。

するものではありませんでした。また、こうした三彩陶器は、出土例が非常に少ないものでした。

現在判明している出土遺跡は、日本全体でも40数カ所で、その半分が畿内とその周辺だけです。おそらく、三彩陶器の製作は極端に少なく、このような希少な遺物が出土することは、このお寺が中央の政権ときわめて強い関係があったことを示しているのです。

正家地区遠景
（恵奈郡の中心地だったと考えられる）

当時の政治・文化の中心から遠くはなれていた恵奈郡のこの正家の地に、有力な権力者がいた証しであり、文化の国際交流のなかで、遠く唐やペルシャの文化と深い関わりを持つほどの重要な地であったことの証しだと考えられるのです。

ここに、「古代の不思議」の謎解きの一つのヒントがかくされています。

先に述べた「五十戸制」は、朝廷が地方を支配するために整備した制度にほかなりません。飛鳥池遺跡の『**木簡**』によって、私たちのふるさと恵奈では、7世紀後半には、まだ恵奈郡は成立していないものの、五十戸制は実施されており、そ

発見された木簡（レプリカ）
（奈良県明日香村・飛鳥池遺跡出土）
（恵那市教育委員会作成レプリカ）

の後、８世紀中頃には、『**東大寺奴婢帳**』によって恵奈郡が成立していたことが分かりました。

正家廃寺の造営が、ちょうど８世紀前半から始まり、中頃には主要伽藍が完成したことが発掘調査によって明らかとなっています。このことから、正家廃寺は、恵奈郡の成立、すなわち大和朝廷の地方支配のための政策の実行と深いかかわりがあったのではないかと考えられるのです。ここにも、「古代の不思議」の謎解きの二つ目のヒントがかくされているように思われます。

東大寺奴婢帳・美濃国司解

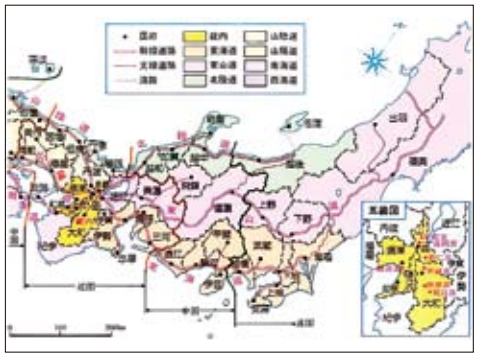
東山道

正家廃寺は、大和朝廷が東国の支配を進めるにあたって、深いかかわりをもち、重要な役割を果たしていたのではないかということが少しずつ分かってきましたが、もう一つ忘れてはならないのが「**東山道**」の存在です。

日本の国家的統一が進む中で、中央と地方は、律令制のもとで「**五畿七道**」に区分されていましたが、東山道というのは、この七道の一つにあたります。五畿というのは、都を中心とした畿内五国（大和・山背・摂津・河内・和泉）のことです。そして、七道というのが、東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道のことです。古代においては、「道」といった場合、行政区画名をあらわす場合と、そこを通過する主要官道をあらわす場合の２とおりがありました。

美濃国は、行政区画としては、東山道に位置づけられ、また、中央との連絡・物資輸送が行われる官道としての東山道は、近江国から美濃国を経て東日本を

東山道


五畿七道

縦断し陸奥国（現在の福島県以北）にいたっていました。

当時、里と里、村と村を結ぶという性格の道のほかに、中央と地方を結ぶという性格の官道の重要性が増してきました。つまり、国家組織を拡充するために、中央と地方を結ぶ急速な通信、多数の軍隊や大量の物資の移動、献納品の輸送などが必要となり、それに見合う道が必要となったのです。このような性質の道は、古墳時代にはじまり、やがて８世紀前半、古代専制国家を完成した律令政府は、中国の唐の律令にならって整備された**「駅伝制」**※1 を整備していきます。

当時、都と各国の国府（今の県庁にあたる行政機関）とは、いくつかの幹線道路で結ばれていました。そのひとつが東山道なのです。沿線には30里（約16km）の間隔で**「駅家」**（近世の宿場にあたる）が設けられ、各駅家には「駅馬」をそなえ、人や物資の移動、運搬にあてていました。

駅家は、四面が築地で囲まれ、正面には門があったそうです。内部には、倉庫・宿泊施設・馬屋・事務所などがあっ

駅伝制

※1 「駅伝制（えきでんせい）」とは、中央から辺境（へんきょう）にのびる道路に沿って、適当な間隔（かんかく）で人・馬・車などを常備した施設「駅」を置き、駅を伝わって往来する交通・通信の制度のことです。

広大な地域を支配する中央集権国家が成立すると、外敵（がいてき）の侵入や国内の反乱にただちに対処する場合を含め、支配維持のために中央と地方とを常時連絡する手段が必要となり、さまざまな形の駅伝が制度として定められました。

駅家跡

駅家のようす

たと思われます。また、駅馬は中央と地方を往復(おうふく)する役人（官使(かんし)）が、その資格の印である「**駅鈴**(えきれい)」を示し利用しました。官使は、駅家で馬をかえ、食事をとり、時には、宿泊をしながら旅をしたのです。駅家の維持(いじ)・管理(かんり)には「**駅子**(えきこ)」※2を出せるだけの40～50の郷戸(ごうと)があり、それを支える肥沃(ひよく)な耕地が必要であったといわれています。当時の恵奈の地も、駅家としての重要な役割が与えられるようになったのです。

駅鈴

駅子

※2　「駅子（えきこ）」とは、ふだんは駅馬（えきうま）を飼育しながら、駅家に勤務しました。駅馬を供給（きょうきゅう）する際に、駅子1名が付けられて先導役（せんどうやく）をつとめるとともに、返された馬を駅家まで連れ帰りました。
　駅子は徭役（ようえき）を免除（めんじょ）されましたが、駅の仕事とそれにともなう負担はそれ以上であり、特に交通量の多い道ではその負担は大きなものがありました。とくに時代がくだるにつれて官人が駅鈴（えきれい）の定め以上の馬の提供（ていきょう）を強要（きょうよう）したり、目的外の使用も増加したりしました。こうした負担に耐え切れなくなった駅子が負担を拒絶（きょぜつ）して逃亡（とうぼう）の一因にもなったといわれています。

恵奈と東山道

東山道は、美濃国には８つの駅家があったと『延喜式』という文献にあり、恵奈郡には大井駅・坂本駅があったとされていますが、現在のどの場所が駅家の場所にあたるかはっきりとはわかっていません。

ただ、古代の交通路の祭祀に関係があるとされる遺物が各所で表面採集されたり、発掘で出土したりしていますので、これら出土品や遺跡、地名などを結びつけることによって、東山道のおおよその道筋や駅家の位置をさがしもとめることができるのです。

恵奈では、国境の**神坂峠付近の祭祀遺跡**や中津川市の**落合五郎遺跡**付近にも出土している「鏡・玉・剣」などの形をした小型の石製品が各所で発見されています。三郷町の「下田中遺跡」では斧形のもの、長島町の「祖理見遺跡」は鏡形と勾玉形、東野の「若宮遺跡」では鏡形、**「中之島遺跡」**では剣形のものが採集・発掘されています。さらに瑞浪市釜戸町の「公文垣内遺跡」、土岐町の「高屋遺

神坂峠付近の祭祀遺跡址

落合五郎遺跡址

恵那市内出土の石製模造品

中之島遺跡址
（東野）

跡」、明世町においても、遺物が比較的まとまって採集されています。

　これらの遺物をつなげていくと、東山道は、現在の瑞浪市土岐町、釜戸町から、恵奈に入り、現在の三郷町佐々良木を通り、長島町の永田、正家、そして東野を経て、中津川市の坂本へ通じ、手賀野から落合を経て、神坂峠を越え阿智（現在の長野県阿智村）へとつながっていたものと考えられています。また、土岐駅は、瑞浪市小田町馬屋か釜戸町宿、**大井駅**※1は、郡家があったといわれる正家廃寺跡付近か東野、**坂本駅**※2は中津川市駒場か落合に駅家があったと推定されています。

大井駅

※1　「大井駅（おおいえき）」とは、古代東山道の土岐駅（ときえき、現瑞浪市）と坂本駅（さかもとえき、現中津川市）の間におかれた駅名。現在の恵那市大井町に比定（ひてい）されています。

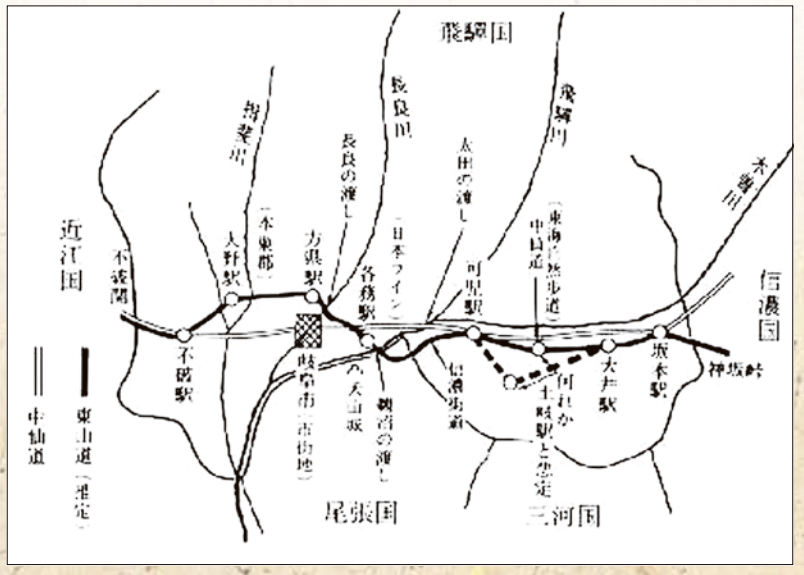
　土岐駅との距離が短いにもかかわらず、美濃国でただ一つ一郡に二駅が設置されたのは、坂本駅の先に東山道最大の難所である神坂峠がひかえているためといわれています。また多くの駅が規定数の駅馬をそろえていなかったにもかかわらず、恵奈郡は他の倍となる10頭を規定通りそろえていたことも同じような理由からです。

坂本駅

※2　「坂本駅（さかもとえき）」とは、古代東山道の駅名。比定地（ひていち）については中津川市駒場、落合と諸説があり、また大井駅の衰退（すいたい）を補填（ほてん）するために駒場から千旦林あたりに移ったともいわれています。

　『延喜式（えんきしき）』によれば規定の駅馬数10頭に対して30頭を備えており、東山道では近江国勢多（せた）駅、信濃国阿智（あち）駅と並んで最多でした。もっとも、勢多駅は東海道との共用（きょうよう）のため、また阿智駅も神坂峠をひかえていたためといわれています。

　神坂峠越えは駅子にとって重すぎる負担でした。一般の駅子が庸（よう）と雑徭（ぞうよう）のみ免除（めんじょ）されるのに対し、土岐・大井・坂本の駅子は特別に調（ちょう）を加えた課役（かえき）が免除されていました。



美濃国の駅家と東山道順路

ところで、出土した石製の遺物品には、形に関係なく小さな孔があけられていて、ひもでつりさげられるようになっていました。このことは、石製品を榊の枝などにつりさげて祭ったことを示しています。『**万葉集**』※3 に次のような和歌がのせられています。

千早ぶる 神の御坂に 幣まつり
いわう命は 母父がため

この歌には、「神坂峠で榊をお供えし、父母のために旅の安全を祈ります」という作者の思いが込められています。当時の旅は、現在とちがい、つねに危険がつきまとっていました。山や川などの危険な場所には、恐ろしい神が住むと信じられていました。そこで旅をする人々は、危険な場所では神々に供え物を捧げ、旅の安全を祈ったのです。

東山道は、朝廷の東国経営のための最も重要な幹線道路であり軍事道路でした。この東山道の最大の難所が、美濃と信濃の間に横たわる木曽の山並みであり「**神坂峠**」でした。この神坂峠を含む

祭祀遺跡

石製模造品
（中津川市・神坂峠出土）

万葉集

※3 「万葉集（まんようしゅう）」とは、7世紀後半から8世紀後半にかけて編さんされた、現存するわが国最古の歌集のことです。
全20巻からなり、約4500首の歌がおさめられています。作者は天皇から農民まで幅広い階層（かいそう）におよび、詠（よ）みこまれた土地も東北から九州にいたる日本各地におよびました。

神坂峠と恵那山

木曽山脈を切り開く工事の拠点となったのが恵奈だったのです。

恵奈の里の「次米」が天武朝廷に献上された時期は、恵奈の里がまだ「刀支評(土岐郡)」に属していました。しかし、東山道の開削のためには、多くの労働力と人員を必要とします。とても恵奈の労働力だけではまに合いません。全国各地から人が集められていたのです。このような事情の中で、8世紀のはじめに恵奈郡を刀支評（土岐郡）から独立させたものと考えられます。大和朝廷にとって、恵奈は「東国支配の重要な拠点」へと変わっていったのです。

道路が完成したあとも、その維持管理のために多大な経費と労力が必要となります。恵奈には、大井と坂本の2つの駅家がおかれました。駅家は通常、一郡一駅でした。しかも、神坂峠をはさんだ恵奈郡の坂本駅と信濃国の阿智駅との距離は、通常の駅と駅の間の2倍もありました。しかも山間の急峻な道です。これらの駅家と道路の維持管理を恵奈の人々が担っていたのです。

このことからも、朝廷にとって、恵奈

急峻な峠道Ⅰ

急峻な峠道Ⅱ

古代東山道

はとても重要な地であり、結びつきも強かったことがかんたんに想像することができます。恵奈の里から朝廷に「次米」や「奴婢」を献上していたことも、当時の情勢から十分に理解できるものといえるでしょう。ここに、「古代の不思議」の謎解きの三つ目のヒントがかくされているように思われます。

次米献納行列

コラム5

国司・笠朝臣麻呂

8世紀のはじめ、美濃国の支配体制がつくられたころ、美濃の国司として、その役割を果たした人物に「笠朝臣麻呂」がいます。彼は、慶雲3年（706）7月に美濃守（美濃国司）に任命されて以来、国司の地位に14年あまりにわたりとどまりました。8世紀の国司の在任期間は、一般には3年足らずであったことから、この時期の国司として、知られる限りでは、もっとも長い在任記録といえます。

さて、笠朝臣麻呂の美濃国司としての最大の功績は、美濃国と信濃国とを結ぶ東山道のバイパスルートとして、吉蘇路（木曽路）を完成させたことといわれています。これは、律令政府によって高く評価された事業でした。また、これに関連して不破関の整備や、あるいは全国規模で行われた按察使（国司の監察官）補任の一環として、尾張・三河・信濃の国司を監察する按察使を兼務するなど、東山道ブロックの軍事・交通整備事業の推進につとめました。

とくに、彼の在任期間は、律令国家の完成期にあたり、美濃国においてもさまざまな施策が行われました。まず「美濃」の国名表記がはじまり、「美濃（国）」の刻印須恵器の生産もほぼこの時期にはじまりました。さらに、元正天皇の美濃国多芸郡美泉（現在の養老の滝といわれています）への2度にわたる行幸が実現され、元号も「養老」に改元されたといわれます。

古代における美濃国の姿の多くは、この時代に整えられたといわれていますが、このあと、笠朝臣麻呂は美濃守の地位から昇進し、太政官の要職である右大弁となったとも記録されています。

古代寺院の謎にせまる

正家廃寺跡は、東西 100m、南北 70m の大きさを遺し、主要伽藍を法隆寺式に配置する本格的な古代寺院があったこと、また、希少な奈良三彩なども出土していたことを今に伝えています。8 世紀前半に造営がはじまり、その後 9 世紀末か 10 世紀初めごろに主要伽藍の火災をきっかけにして廃絶するまで、1 世紀あまり存続した古代寺院でした。

直接的な文献資料がなく、寺の名や創建の経緯、寺院の性格など直接知ることはできません。行われてきた調査から分かってきたことや遺跡の立地などから、この正家の古いお寺の造営は、**『続日本紀』**※1 にみられる「吉蘇路」の整備と同じように、中央政権の主導で進められ、恵奈郡の仕組みを整えていかなければならない大切な事業の一環として行われていったものではないかと考えられるようになりました。

寺院の建立は、けっして簡単なことではありませんでした。建立に必要な財力、技術力、労働力は多大なものがあ

古代寺院復元図

続日本紀

※1 「続日本紀(しょくにほんき)」とは、『日本書紀』に次ぐ勅撰(ちょくせん)の歴史書のことです。六国史(りっこくし)の第2で、40巻あります。菅野真道(すがののまみち)らの編集(へんしゅう)で797年に成立しました。
697年の文武(もんむ)天皇即位から桓武(かんむ)天皇の791年にいたる95年間の歴史が書かれていて、奈良時代の根本的(こんぽんてき)な史料となっています。

るといえるでしょう。また、地域の古代寺院の建立者は、その地域の有力な豪族であったと簡単にいえることでもありません。

古代寺院というのは、宗教的色彩よりも政治的な意味の強い建造物とみなされることが多いものといわれています。古代において、地方のほとんどの建物は草ぶきであり、農民の住居の多くは、平安時代の初めまで竪穴住居でした。このような時期に、礎石の上に柱を立てた巨大な建造物は、まさに宗教的な権威を超えた政治的権威の象徴であったともいわれています。

恵奈には、中心的な大きな集落はなく、地域の氏寺となるような寺院が見つかっていません。大型石室をもった古墳が一部みられるものの、円墳ばかりで前方後円墳が築造されることはありませんでした。このことは、恵奈にそれほどの有力な地方豪族が存在してはいなかったことを示しています。

そのように考えていくと、8世紀前半の正家廃寺の造営は、やはり恵奈郡の建郡、整備と軌を一にしており、朝廷が美

正家廃寺竪穴建造物礎石

正家廃寺文化財標柱

濃国司の**笠朝臣麻呂**※2に命じて、恵奈郡の中身を整えていく一環として進められたものと考えられます。ここに、「古代の不思議」の謎解きの四つ目のヒントがかくされています。

正家廃寺は、単に恵奈郡の寺院というにとどまらず、吉蘇路の開発や大井・坂本駅の経営とセットで、国家にとって重要な役割を果たすことが期待されたとみるべきだと考えられるのです。

笠朝臣麻呂

※2 「笠朝臣麻呂（かさのあそんまろ）」は、飛鳥時代から奈良時代にかけての貴族です。俗名は笠麻呂（かさのまろ）。姓は朝臣（あそん）で、吉備笠垂の子とする系図があります。官位は従四位上・右大弁。古代吉蘇路（木曽路）の開削（かいさく）者であることは、コラム⑤でも紹介しました。

慶雲3年（706）美濃守に任ぜられると、和銅3年（710）の再任を経て、養老4年（720）まで文武朝（もんむちょう）末から元明（げんみょう）・元正（げんしょう）朝の三朝14年間の長きにわたって美濃守を務めています。

大宝2年（702）から美濃・信濃両国間に山道の開削（かいさく）が始められていましたが、和銅7年（714）には吉蘇路（木曽路）を開通させた褒賞（ほうしょう）として朝廷から封戸70戸・功田6町を与えられました。またこの間の元明朝において、和銅元年（708）従五位上、和銅4年（711）正五位上、和銅6年（713）従四位下と順調に昇進しています。

元正朝に入ると、霊亀2年（716）尾張守（おわりのかみ）を兼ね、養老3年（719）按察使（あぜち）が設置されると、これを兼ねて尾張・三河・信濃の各国を管轄（かんかつ）しました。また、養老元年（717）には従四位上に昇叙（しょうじょ）し、養老4年（720）右大弁（うだいべん）に任ぜられて京官に復しています。

古代の不思議を読み解く

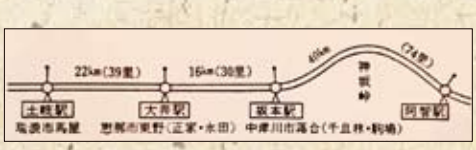
丁丑年（677）、飛鳥池遺跡で出土した『木簡』には、恵奈の里が刀支評（土岐郡）の一部となっていましたが、すでに「国～評（郡）～五十戸（里）」の行政単位の中に組み込まれていたことがわかりました。そして、天平勝宝２年（750）、婢・古都賣のことが書かれた正倉院所蔵文書の『東大寺奴婢帳』には、恵奈郡が土岐郡から分かれて建郡されたことも明らかとなりました。

新たに建郡された恵奈郡の重要性を象徴する役割に、東山道の「駅家」の管理と人夫の用にあたる「駅子」が課せられていたのです。斎衡２年（855）の『**太政官符**』※1 によれば、坂本駅と大井駅をかかえる恵奈郡では、他の駅家に課せられた駅子の数が、ほぼ 120 人から 130 人であるのに対して、恵奈郡の成人男子の全 296 人のうち、その７割にあたる 215 人が任務についたといいます。

この駅子の負担の大きさは、恵奈の人々の生活の大きな荒廃をもたらしまし

太政官符

※1　「太政官符（だいじょうかんぷ）」とは、太政官から八省・諸国に命令を下した公の文書のことです。略して官符（かんぷ）ともいいます。符は上級の役所から管轄下（かんかつか）の役所に下す公文書全体のことです。



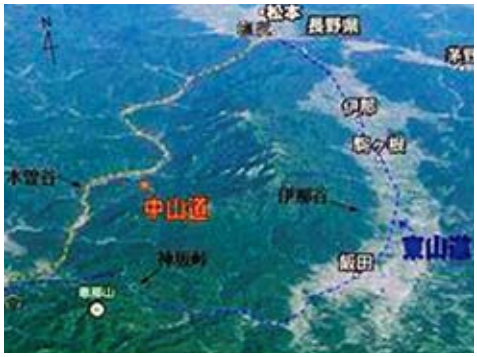
東山道４駅
（土岐駅から阿智駅関係図）

た。駅家は30里（16km）ごとに設置されるのが普通ですが、坂本駅と信濃国の阿智駅の間は74里（約40km）もあったのです。しかも、途中は難所である神坂峠がひかえています。そのため、坂本駅には、通常の3倍にあたる30頭の駅馬がおかれたのです。

さらに、美濃国司に着任した笠朝臣麻呂によって開発が進められ、和銅6年（713）に開通した東山道のバイパスである「**吉蘇路（木曽路）**」の役務負担が加重されたのです。この負担がどのくらいのものか実態はよくわかりませんが、恵奈郡の人々（駅戸）をさらに苦しめることになったと考えられているのです。

恵奈は、山間部に位置し、特に信濃との国境地域では石混じりのやせた土地が多く、肥沃な土地の多い美濃の平野部に比べると農業生産はけっして高いといえません。駅子には、**調・庸・雑徭**※2などの税の免除がなされていましたが、それでも人々の負担は重く、駅家の荒廃がすすむほど、恵奈の人々は苦しんでいたのかもしれません。正家廃寺は、このような社会情勢のなかで、東山道沿いのこ

吉蘇路（木曽路）
（木曽山脈と木曽谷～大桑村）



美濃国東山道経路
（坂本駅以東で分岐する吉蘇路バイパス）

租調庸雑徭

※2 『租調庸雑徭（そ・ちょう・よう・ぞうよう）』とは、奈良時代の税制度のことです。律令により、農民には一人ずつ口分田（くぶんでん）が天皇より貸し与えられていましたが、その代わり、租・庸・調・雑徭などという税を納めなければならなかったのです。

「租」は米の税です。収穫量の3パーセントと聞くと、すいぶん少なく思えますが、実は、そのほかの税が重くのしかかっていました。「庸・調」は成人男子が対象（たいしょう）で、布や土地の特産物を納めます。そのため、戸籍（こせき）を女子といつわる者まで現れる始末でした。「贄（にえ）」という食料品の納税もしなければなりません。

「雑徭」は労役（ろうえき）負担です。建設工事、河川改修、税の品々の運搬など、さまざまな事業にかり出されました。都や九州・東北の警護（けいご）に派遣（はけん）される兵役もありました。

の地に政治的な意味あいをもって造営された特別な建物だったのです。

古代において、地方のほとんどの建物は草ぶきであり、住居の多くは、平安時代の初めまで竪穴住居でした。このような時期に礎石の上に柱を立てた巨大な建造物は、いわば公的な性格を表わし、それ以外の建物とは一見して区別される特別な存在だったのです。

しかし、お寺の造営と経営にはばく大な費用がかかりますので、当然豊かな経済力が必要になります。ただし、経済力だけではお寺を建てることはできません。塔のような背の高い建物、金堂や講堂のような巨大な建物の建築には、精密な設計とこれにもとづく正確な技術が求められます。まして、仏教の教義を理解し、いろいろな宗教的行事を主催することは、経済力だけではどうにもできないことがらなのです。

つまり、地方の古代寺院の造営と経営には、中央からのハード・ソフト両面にわたる支援がなければ成り立たなかったのです。言い方をかえると、地方豪族にとって、古代寺院を造営し経営すること

正家廃寺遺構と出土物

は、自身の経済力と中央との結びつきがいかに強いかを誇示することだったのです。古代寺院の存在は、これをもつ豪族と、もたない豪族の政治的・経済的序列を視覚的に表現することになったのです。

一方、中央にあっては、地方の豪族のうち、えらばれた豪族にのみ寺院造営を許すということで、地方豪族の序列化を進め、地方支配の方式を確立しようとしたのです。

したがって、古代寺院は中央と地方のそれぞれの政治的思わくが合致した、まさに時代的産物という一面を見落としてはならないと考えられます。7世紀に建立された古代寺院は全国で700ケ寺を超えるといいます。まさに寺院の建設ラッシュが到来した背景には、こうした「不思議」がかくされていたのです。

正家廃寺跡

コラム6

恵奈古窯址群

恵那市の長島町の永田や正家、三郷町の野井では、平安時代(11世紀)の窯跡が多数みつかっています。これらが「恵那古窯址群」です。これらの窯では、瓷器・灰釉陶器などとよばれる釉薬をかけた陶器を焼いていました。これは、中国から輸入された白磁・青磁をめざした焼き物で、当時の国内産の陶器としては、最高級のものであったといわれています。

この灰釉陶器の生産は、最初は現在の豊田市の猿投が中心でしたが、より良質の陶土を求めて、東濃地方へと生産の中心が移っていきました。なかでも、恵奈の永田や正家では、純白で精良な陶土が得られたことから、良質な製品を多く産出することができました。

恵奈の古窯の製品は、灰を水に溶かした灰釉を釉薬にしており、見事な美しさだったと伝えられています。また、恵那古窯址群のうち、「永田一号窯」や野井の「亀ヶ沢二号窯」では、灰釉陶器と同時に緑釉陶器を焼いていたと伝えられています。緑釉陶器というのは、緑色の釉薬をかけた陶器で、三彩陶器と同じようにとても貴重なものでした。

このような恵奈を含めた東濃の窯の製品は、11世紀に入ると東山道に沿って、関東・東北方面へどんどん運ばれていきました。当時の朝廷の蝦夷征討と北辺開拓の一大拠点であった多賀城(現在の宮城県多賀城市)でも、東濃の灰釉陶器が多数発掘されています。恵奈から何百kmと離れた多賀城の守りについていた将兵も、この地で作られた椀や皿を使っていたのです。

写真資料①

（恵那市史資料室保管遺物より）

先土器時代の石器（笠置町・堀田遺跡）

磨製石斧（東野・大野吾遺跡）

土師器（長島町・千田三反田遺跡）

高杯・土師器（長島町・祖理見遺跡）

甑（大井町・丸池遺跡）

縄文土器　深鉢（東野・染戸遺跡）

縄文土器（東野・染戸遺跡）

甕型土器（笠置町・中切遺跡）

写真資料 ②

（恵那市内遺跡出土物より）

縄文土器（串原・大平遺跡）

磨製石斧（串原・大平遺跡）

打製石器（飯地町・鹿路山遺跡）

石鏃等（飯地町・岩切遺跡）

石皿・磨石等（中野方町・尾の上遺跡）

土師器（笠置町・堀田遺跡）

縄文土器（中野方町・かせわ遺跡）

風鐸・風招等（長島町・正家廃寺跡）

写真資料 ③

（恵那市内遺跡址より）

メンヒル（笠置町・堀田遺跡）

古墳時代の住居跡（東野・大野吾遺跡）

縄文時代の住居跡（三郷町・下田遺跡）

縄文時代の住居跡（飯地町・鹿路山遺跡）

円墳（明智町・徳平古墳）

横穴式石室（長島町・千田 17 号墳）

塔跡（長島町・正家廃寺跡）

上空写真（長島町・正家廃寺跡）

古　代　歴

年	時代	西暦	年号	国のできごと	文化	西暦	年号	郷土のできごと
250万年前 〜 1万6000年前	旧石器時代			■氷河期が終わる ■採集や狩りによって生活する	先土器文化 石鏃			●槍先形尖頭器を使用する ・堀田遺跡（笠置町） ●尖頭器状掻器を使用する ・庄兵衛田遺跡（中野方町） ・若宮遺跡（中野方町）
3000 1000 紀元前	縄文時代			■稲作が始まる ■金属器の使用が始まる	縄文文化 縄文土器			●石鏃形石器を使用する ●縄文土器・竪穴住居を利用する ・祖理見遺跡（長島町） ・鹿路山遺跡（飯地） ・大野吾遺跡（東野） ・大平遺跡（串原） ・染戸遺跡（東野） ・下田遺跡（三郷町） ・砦遺跡（三郷町）
紀元後	弥生時代	57	垂仁86	□倭の奴国の王が後漢に使いを送る	弥生文化 弥生土器 高床倉庫 銅鏡			
10.0				■各地に小さな国ができる	銅剣 銅鐸 銅矛			●弥生土器を使用する ・祖理見遺跡（長島町） ・長根遺跡（中野方町） ・宿竹遺跡（中野方町） ・庄兵衛田遺跡（中野方町）
200		239	神功39	□邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る				
300	古墳時代			■大和政権の統一進む ■倭が高句麗と戦う	古墳文化 古墳 銅鏡・玉・埴輪			
400		478	雄略22	□倭王武が中国の南朝に使いを送る	大陸文化の伝来 漢字 儒学 進んだ技術			●古墳がつくられる ・大野吾遺跡（東野）
500		593	推古元	□聖徳太子が摂政となる				●村（住居群）が形成される ・大野吾遺跡（東野） ・祖理見遺跡（長島町） ・下田遺跡（三郷町） ・森山古墳（三郷町）

史　年　表

年	時代	西暦	年号	国のできごと	文化	西暦	年号	郷土のできごと
600	古墳時代 飛鳥時代	607	推古12	□小野妹子を隋に送る	飛鳥文化			●多くの古墳がつくられる ・千田古墳群（長島町） ・能万寺古墳（長島町） ・丸池遺跡（大井町） ・徳平古墳（明智町） ・道場古墳（中野方町） ・平古墳（山岡町）
		645	大化元	□大化の改新 ■改新政治の進展	法隆寺			
		663	天智２	□白村江の戦い ■公地公民の制	百済観音像			
		672	天武元	□壬申の乱		677	天武６	●朝廷に主基米（次米）を献上する ・三野国刀支評恵奈五十戸の造・阿里麻
700		701	大宝元	□大宝律令	天平文化	706	慶雲３	●笠朝臣麻呂美濃国司に任命される
	奈良時代	710	和銅３	□都を奈良（平城京）に移す ■律令政治改革	古事記 風土記			●美濃国に恵奈郡六郷が成立する ・絵上郷、絵下郷、竹折郷、坂本郷、阿岐郷、淡気郷 ・下田中遺跡（三郷） ・中之島遺跡（東野） ・祖理見遺跡（長島） ・若宮遺跡（東野）
		752	天平勝宝４	□東大寺建立	日本書紀 万葉集	713	和銅６	●この頃正家廃寺築造が始まる ●東山道バイパス「吉蘇路」が開通する
		784	延暦３	□都を京都（長岡京）に移す	東大寺大仏	750	天平勝宝２	●東大寺大仏殿建立に際し奴婢を献上する ・美濃国恵奈郡絵下郷の婢・古都賣
		794	延暦13	□都を京都（平安京）に移す	正倉院			
800	平安時代	804	延暦23	□坂上田村麻呂が胆沢城を築く	天台宗（最澄） 真言宗（空海）			●石製模造品を使用する
		866	貞観８	□藤原良房が摂政となる				
		887	仁和３	□藤原基経が関白になる				
		894	寛平６	□遣唐使が停止される	国風文化			
900					仮名文字			●この頃正家廃寺が焼失する
		935	承平５	□平将門の乱（～40）	古今和歌集			
		939	天慶２	□藤原純友の乱（～41）				
1000		1016	長和５	□藤原道長が摂政となる	枕草子			この頃まで「古代」↑ この頃から「中世」↓
				■藤原氏全盛	源氏物語			
		1069	延久元	□後三条天皇が荘園の整理を行う	大和絵			
				■武士の台頭	絵巻物			
		1086	応徳３	□白河上皇の院政が始まる	平等院鳳凰堂			
1100		1156	保元元	□保元の乱、平治の乱（59）	中尊寺金色堂			○加藤景簾が遠山庄の地頭となり岩村城を造る
		1167	仁安２	□平清盛が太政大臣になる				
		1185	文治元	□平氏がほろびる ■荘園公領が広がる		1185	文治元	●永田古窯跡で焼き物の生産が始まる
		1185	文治元	□源頼朝が守護・地頭の設置を認められる				
	鎌倉時代	1192	建久３	□源頼朝が征夷大将軍になる	鎌倉文化			
1200		1221	承久３	□承久の乱	浄土宗 臨済宗	1221	承久３	○承久の乱の一条信能が岩村で斬られる
		1232	貞永元	□御成敗式目	彫刻運慶 平家物語			

この本をつくった人たち

編著者 小 板 忠 昭（元恵那市立山岡中学校 校長）
監　修 西 部 良 治（恵那市文化振興会 会長）
協　力 恵那市 市史資料室
恵那市 おおわご遺跡資料館
正家廃寺保存会
中野方ふるさと資料館

参考・引用した本や資料など

・恵那市史
・恵那郡史
・岐阜県史
・恵那の歴史と物語 30 話
・遺跡と遺物が語る恵那市のすがた
・古代地方寺院の全体像を残す正家廃寺跡
・正家廃寺発掘調査報告書
・坂東への入口 正家廃寺
・恵那・蛭川の歴史と文化
・図説中津川・恵那の歴史
・わかりやすい岐阜県史
・画像提供　奈良文化財研究所

恵那市ふるさと学習読本　vol.8　ふるさと歴史編②
正家廃寺と古代の恵奈
発行日／ 2021 年 3 月 1 日
発行者／恵那市教育委員会
〒509-7292 岐阜県恵那市長島町正家1丁目1番地1
TEL 0573-26-2111

© 無断転載はご遠慮ください。

恵 那 市